In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	地理学史資料としての地形図 ： 京都大学総合博物館地理作業室収蔵・梅原末治寄贈地形図の検討
Author	網島, 聖
Citation	空間・社会・地理思想. 23 巻, p.13-35.
Issue Date	2020-03-13
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
Description	
DOI	10.24544/ocu.20200518-005

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

空間・社会・地理思想 23 号，13-35 頁，2020 年
Space, Society and Geographical Thought

地理学史資料としての地形図
――京都大学総合博物館地理作業室収蔵・梅原末治寄贈地形図の検討――

網島　聖 *

Takashi AMIJIMA

A Study of Topographical Maps Donated by an Archeologist Sueji Umehara and Their Significance in the History of Prehistorico-geographical Study

I はじめに

西日本の大学にある人文系地理学教室の多くが史学科ないし史学地理学科に所属していたという伝統を共有する[1]。その発信源となったのが、第二次世界大戦前における京都帝国大学文科大学史学地理学第二講座（以下、京都大学文学部地理学教室とする）といっても過言ではないだろう。

京都大学文学部地理学教室において形成され、今日にまで継続・発展されてきた地理学研究のテーマや方法論は、西日本を中心とした地理学界の議論をリードするとともに、研究動向に対する一定の規範力を発揮したといえる。水内（2006）は京都大学文学部地理学教室の研究者やその出身者により選択された日本における地理学「ナショナルスクール」形成期の研究テーマのうち、近年検討が進んだ地政学[2]とともに、ドイツ景観論[3]の影響下に発達した実証主義的な歴史地理学研究[4]を地理学史研究における検討が求められるテーマに挙げた。そして、後者の特徴として歴史学および考古学研究との交流を指摘している[5]。

京都大学文学部地理学教室では初代教授の小川琢治と助教授の石橋五郎以来、時代の変遷に従う地理の歴史的側面を重視する立場が貫かれていたが、歴史地理学という研究領域を明確に意識する主張は小牧実繁により始まったとされる（京都大学文学部地理学教室 2008）。小牧は主著である『先史地理学研究』の中で、歴史地理学の使命を歴史時代のある時の断面における土地・地域（景観）を復原することと規定した（小牧 1937）。第二次世界大戦後、「時の断面」説は藤岡謙二郎によって継承され、『先史地域および都市域の研究』（藤岡 1955）で表明された「景観変遷史法」[6]へと発展し、以降の日本における歴史地理学研究の方向性を決定づけるものとなったとされる（京都大学地理学教室 2008）。このように、小牧に始まり藤岡によって大きく展開した先史地理学の景観復原研究は、日本における歴史地理学史上の重要なトピックを提供するものといえるだろう。

近年の地理学史研究の進展により、小牧の先史地理学に関する個人史的側面については足利（1982）や川合（2017）による言及がある。しかし、当時の歴史地理学史の検討は端緒についたばかりであり、未だ検討の光が当てられていない側面も多い。特に従来不足してきたと思われるのが、京都帝国大学の歴史地理学と考古学の関係についての検討であろう。上述のように小牧と藤岡はともに先史地理学を重要な検討対象にしつつ、考古学の調査や知見を踏まえた研究を数多く発表した。また、彼らは濱田耕作や梅原末治を中心とする京都帝国大学の考古学教員による研究指導を直接に受けていた。既に考古学史研究から小牧と藤岡への言及も存在し、ある意味、両者は考古学者の範疇で捉えうる存在ともいえる（角田 1994a）。したがって、彼らの時代の地理学教室に考古学教室から研究や教育上、どのような影響があったのかは重要な検討課題といえよう。

また、考古学という学問の特性を考えると、学史研究を行う上で重要な方法論上の問題が提出される。それは、考古学においては文献やそれに依拠した言説にとどまらず、遺物や実測図、地図などといったモノが学史研究資料として多数残されているという点である。考古学との関連では、学史研究においてもこうしたモノの分析も重要になるだろう。しかしながら、藤岡が京都大学総合人間学部に残した考古遺物を紹介した例外は存在するものの[7]、物質性に注意した学史研究は未だ不十分な状況にある。本稿では考古遺物や実測図を直接議論する準備はないが、地形図という資料がもつ物質性[8]に留意した議論を進めたい。

*　佛教大学　歴史学部

一方、考古学史研究の立場から梅原の考古学調査に関する言及が既に行われている。しかし、梅原の中国における古鏡研究（岡村 2011）や朝鮮半島における古跡調査に関する検討（吉井 2006）が充実しているのに比較して、彼の日本国内における調査例については未だ検討が十分ではない。しかも、梅原の考古調査やその影響を地理学はじめ関連諸学との関わりに位置付ける作業はほとんど見られない状態にある。したがって、梅原寄贈地形図の内容を地理学史に関連づけて位置付ける作業は考古学史研究に対しても重要性を有すると考えられる。

本稿は以上の問題意識を背景に、京都大学文学部における地理学教室と考古学教室の研究・教育上の交流を検討するための基礎的資料として、京都大学総合博物館地理作業室に収蔵される梅原末治寄贈地形図（以下、梅原寄贈地形図と略する）のコレクションを紹介し、その地理学史上の意義について考察することを目的とする。

京都大学総合博物館地理作業室には、地理学教室が継続して収集してきた地形図に加え、各時代の教員が寄贈した地形図も混在させて保管してきた。その中に考古学教室の第二代教授であった梅原末治により寄贈された地形図が数多く含まれており、その大部分には梅原による調査記録などの書き込みが存在する。そこで、地域ごとに混在して保管されている地形図群から梅原寄贈地形図のみを抜き出して整理し、図幅の地域的分布を確認するとともに図面への書き込みや加工の内容を記録する。また、その内容を梅原の自伝『考古学六十年』（梅原 1973）や『京都大学文学部五十年史』（京都大学文学部 1956）などに記述された彼の調査履歴と対照させ、各地形図の利用状況を検討する。これにより、歴史地理学史および考古学史研究に対して梅原寄贈地形図の意義を位置づけたい。

II 考古学教室と地理学教室

(1) 京都帝国大学における地理学と考古学の制度化

明治40（1907）年9月京都帝国大学文科大学に史学科が開設された。明治45（1912）年当時の史学科の講座は国史学が2講座、史学地理学が3講座（第一西洋史、第二地理学、第三西洋史）、東洋史が3講座あった。当時の東京帝国大学においては、地理学は史学科の補助科目に過ぎず西洋史の中で講じられており、独立した講座は設置されていなかった。これに対し、京都帝国大学では史学科開設委員の内田銀蔵教授による「歴史学の理解には地理学の知識が不可欠である」とする意見により、東京帝国大学理科大学地質学科の出身で当時農務省地質調査所の技師であった小川琢治を招聘して、独立した地理学講座の設置を進めることとなった（京都大学文学部地理学教室 2008: 8-13）。

京都帝国大学文科大学に考古学の講座が設けられたのは遅れて大正5（1916）年9月のことだが、その設置はすでに史学科の開設当初から予定されたものとされる。考古学講座の開設に先立って、大正3（1914）年7月に文科大学陳列館（以下、文学部陳列館とする）が竣工され、教室員に島田貞彦と梅原末治が加わり、欧州留学からの濱田耕作教授の帰国を待って考古学講座が開設された。なお、考古学講座の開設には地理学の小川による推挙があったとされ（東方学会 2000a）、その担当教員に内定していた濱田は、明治43（1910）年に小川および狩野直喜、内藤湖南による中国北京の敦煌遺書の調査や洛陽の調査に随伴している。また、大正元年からは内藤、小川の勧めにより3年間のヨーロッパ留学に赴いている。他にも、小川琢治の四男・環樹の妻は濱田耕作の娘であるなど（東方学会 2000c）、初代地理学教授小川琢治と初代考古学教授濱田耕作の間には密接な個人的関係が存在したことが窺えよう。

地理学教室と考古学教室の関係を検討する上で重要なポイントが上述の文学部陳列館の存在である。これは当時史学科の各教室で収集する図書や標本、史料の保管場所として新たに耐火建築の収蔵庫が求められたことから設置された施設である[9]。

館内の整備は小川教授を監督主任とし、各教室で助手、副手が収蔵品の管理実務に対応する体制をとった。なお、小川の後任で大正6（1917）年以降に文学部陳列館の監督主任となったのは濱田である。考古学においては各地の出土品が研究の基礎となることから、講座の設置以前から各地へ積極的に出張して組織的調査を行うとともに、出土した遺物は事情が許す限り持ち帰って文学部陳列館の考古遺物収納棚に収蔵された。また、小川指揮下の地理学でも遺跡等の発掘調査に赴くことがあり、出土した遺物はやはり陳列館の考古遺物収納棚に収蔵されたという[10]（梅原 2005）。

今一つ、文学部陳列館における考古学と地理学を含めた諸講座の交流を考える上で見過ごせないのが、「カフェ・アーケオロジー」と称された濱田の研究室であろう。文学部陳列館1階北側の考古学陳列室に隣接して常に開放された濱田教授室が存在し、

そこでは文学部の教授陣や様々な来訪者が若い教室員を交えて談論する環境となっていた。とりわけ毎日午後4時頃には史学科の教授陣や若手研究者が集い、お茶とともに様々な雑談が交わされたという（藤岡 2005）。その頻繁で重要な訪問者の1人には地理学教授の小川も存在した。濱田の研究室は当時、毎日新聞京都支局長であった岩井武俊により「カフェ・アーケオロジー」と称されて著名となった[11]。

以上のように、創設当初における京都帝国大学文科大学では地理学教室と考古学教室の間に密接な関係があったことがわかる。本来、こうした講座の垣根を越えた関係は両者のみの間にとどまるものではなく、文学部の他分野も関わるものであったことに注意が必要である。しかし、両者がそれぞれ日本の大学における最初の設置講座であったことや、その背景には東京帝国大学との差異化を念頭に、文献のみには依らない歴史研究の体系を築こうとする史学科開設委員の内田にはじまり、招聘された小川、濱田らに共有された強い意志が存在したことから、特に密接な関係を保持していたと考えられる。

(2) 小牧実繁、藤岡謙二郎と考古学教室

制度化された京都帝国大学の地理学教室と考古学教室の間に形成された研究の例として、小牧実繁が打ち立て、藤岡謙二郎により発展された先史地理学の景観復原研究が挙げられるだろう。

小牧を京都大学文学部地理学教室の後継者とした小川は、大正10（1921）年に地質鉱物学講座の立ち上げに当たって文学部から理学部に転籍し、小牧の指導を考古学の濱田に託すこととなった[12]（角田 1994b）。大正14（1925）年7月、濱田は長峰県北高来郡有喜町村（現在の諫早市六本町有喜）の有喜貝塚の発掘に際して、京都帝国大学助手に任ぜられたばかりの小牧を伴い、発掘調査の実地指導を行なった。この発掘成果は、濱田と考古学助手であった島田と小牧との連名で発表された。その背景には、「小牧先生の名を逸早く学会に出そうとした濱田博士の意図があった」とされる（角田 1994b）。

濱田と小川は小牧に対して地理学の観点から考古学的研究を試みるよう期待し、地理学とともに考古学をも実地に習得するよう勧めた。例えば、小牧は大正15（1926）年4月には文学部講師を委嘱され、「先史聚落地理」の講義を旧石器時代の地理[13]をテーマとして行っている（東方学会 2000a: 21-22）。これは小川と濱田から講義の内容を考古学の学生も聴けるものにすることを求められたためであったという。また、小牧は昭和2（1926）年4月東亜考古学会による満洲関東州貔子窩の先史時代遺跡発掘に参加し、濱田による遺跡発掘の指導を受けている。さらに、同年の夏には濱田教授の海外出張に随伴して英国への海外留学を行った。この際、濱田は旧知の関係先に働きかけ、小牧のロンドンにおける下宿の手配まで行っている。小牧はヨーロッパで主にイギリスとフランスに滞在し、現地の著名な人文地理学者たちと交流する一方、旧石器時代の著名な遺跡[14]を訪ねて先史地理学の構想を練りあげた（東方学会 2000a: 22-23）。なお、この留学中には同様に留学中であった考古学の梅原とパリで会合し、後の日本地政学の主張に通じる「満州」の所感を述べていることが指摘されている（柴田 2006: 6）。小牧はこのように濱田から考古学の訓練を受け、帰国後も考古調査を継続し、主に旧石器文化の調査・研究を精力的に進めることとなった（足利 1994）。

昭和12（1937）年3月に地理学の石橋五郎教授が定年退官すると、濱田が史学地理学第二講座を兼担し、既に助教授となっていた小牧は同講座の分担を命じられた。昭和11（1936）年12月、小牧はそれまでに発表した諸論文を補訂・編集した『先史地理学研究』を京都帝国大学に学位請求論文として提出し、翌12年8月5日、地理学を専攻する研究者としては日本で初めて文学博士の学位を取得した。この論文の審査にあたっては濱田が主査を務めている。なお、濱田は文学部を離籍した後も小牧との師弟関係は続け、多忙の中、大正13（1924）年1月の台湾巡遊には小牧を随伴している（角田 1994: 129）。

小牧による先史地理学の指導を受けつつ、考古学教室と、より直接的関係を持ったのが藤岡謙二郎である。藤岡は昭和10（1935）年に京都帝国大学文学部に入学すると、濱田の「広い学風と人格を慕って」考古学を専攻した（藤岡 1979: 15）。ただし、地理学には濱田門下[15]の小牧が存在したことから、当初より地理学専攻も念頭にあったとされ、藤岡の学問的関心に当初から「先史地理学への傾斜」が読み取れると指摘されている（足利 1994）。すなわち、藤岡は当初から考古学と地理学の中間領域に研究テーマに設定したといえよう。

昭和12（1937）年夏、濱田は藤岡が卒業論文の制作に取り組んでいた時期に京都帝国大学総長となり、考古学教室を去ることとなった。さらに、総長就任後約一年で病没している。そのため、卒業後の藤岡は考古学教室に有給副手として残る一方、進学した大学院では「後氷期と文化」をテーマに地理学教室の小牧教授に加え、考古学教室では梅原助教授の指導を受けた。

梅原の教育は浜田とは異なり、学生に対してより技術者的訓練の必要性を強調したという。藤岡は「元来浜田的学風を好んだ私にとっても当時の梅原助教授の実測・実習[16]は、苦手であったが、今日考えると異物そのものへの彼の観察のするどさは、のちに地理学の道を歩んだ自分にはよい勉強になった」と述べ、「後年の私自身の学生に対する厳格な指導もまた、むしろこの梅原に似ているのではないかとしばしば人にいわれる」として、梅原の考古学に関わる技術的な指導が後年における藤岡の地理学研究や教育に活かされたことを述べている（藤岡 1979: 68-69）。

史学科考古学専攻を卒業した後、藤岡は昭和14（1939）年には立命館大学専門部地歴科に考古学担当の講師に就任するとともに、予科で地理を講じるなど地理学への関わりを深めた。昭和16（1941）年に立命館大学法文学部の地理学科で専任講師に就任すると、以降は地理学を専業とし、考古学者から地理学者への転身を果たした。なお、藤岡は「もともと私の専攻分野は濱田考古学としては亜流の先史学部門、もっと具体的にいえば濱田門下でもあった小牧教授の本来の専門領域を継承したにすぎないのである。この場合、梅原先生は私を考古学教室から地理学教室に誘導して下さったのである」と述べ、本来の関心が先史地理学にあり、地理学への転身を梅原に導かれたものと表現している（藤岡 2005）。いずれにせよ、こうして藤岡は考古学と地理学の境界領域を開拓していった[17]。そして昭和24（1949）年に京都大学分校に着任するとともに、文学部では師である梅原が担当していた先史地理学の講義を引き継ぐなど、京都大学文学部の地理学関連講義や演習を担当し、卒業論文・修士論文の審査にも副査として度々関わり、後進の歴史地理学者育成に大きな影響力を発揮した（京都大学文学部地理学教室2008: 24-30）。

(3) 梅原末治と実証的考古学

濱田の病没後、京都帝国大学考古学教室の二代目教授となったのが梅原末治である。上述のように、小川・濱田時代に築かれた地理学と考古学の密接な関係もあり、先史地理学研究の開拓を行った小牧と藤岡も梅原と密接な関係を持っていた。

明治26（1893）年8月31日、梅原は大阪府南河内郡古市村（現在の羽曳野市）の農家に生まれ、同志社の普通中学を卒業したが、健康上の理由で上級学校には進学できなかったという。生家は河内の古墳群の中にあり、中学在学時より日本歴史地理学会に参加して、考古学に関わる活動を開始した。この活動を通じて梅原は喜田貞吉[18]や小川琢治をはじめ、関野貞、高橋健自、天沼俊一、谷井済一などといった当時第一線で活躍する考古学、歴史学、地理学、美術史の研究者と面識を持ち、その仕事を手伝うことで信頼を勝ち取って行ったとされる[19]（穴沢 1994）。

大正2（1913）年9月には、上述の谷井により京都帝国大学の今西龍を紹介され、拓本の技術を見込まれて出入りを許可される。ここから梅原の京都帝国大学における考古学研究がスタートする（梅原 1973: 18-20）。また、洛北高野における小野毛人の銅版墓誌の調査において、梅原の拓本技術が東洋史学科の内藤虎次郎（湖南）の目にとまると、内藤を通じて古鏡研究家の富岡謙蔵とも知遇を得る。彼らの熱心な引き立てによって、梅原は京都帝国大学において研究者として大成していった[20]（穴沢 1994）。

大正5（1916）年に濱田が外遊から帰国し、京都帝国大学に考古学講座が設置されると、梅原は濱田の右腕として八面六臂の活躍を見せる。当時、濱田は英国でエジプト考古学の大家でロンドン大学教授フランダーズ・ペトリーから形式学的考古学の研究方法を学び、これを日本および朝鮮半島や中国の研究にも導入しようと試みていた（小野山 1992）。型式学的考古学とは、定義したカテゴリー（型式）にモノを当て嵌め、類似関係を求めて分類していく方法であり、これを達成するためには時間をかけて遺物に即した地道な作業を経なければならない（山中 2002）。すなわち、ペトリーの考古学研究法は正確な事実の観察と記載を大原則に据え、これを実践するために訓練された組織と人材を必要とするものであった。しかし、当時の日本の考古学会には遺跡の正確な測量や記録、遺物の整理や図面作成、写真撮影や報告書の出版といった技術の訓練を受けた人材は皆無に等しい状況であった。また、濱田自身もどちらかというと「芸術家肌、天才肌」[21]と評され、こうした作業を不得手にしていたとされる（山中 2002: 105-108）。そこで、これらの技術を有する関野貞や高橋健自といった建築・美術史系の研究者[22]から既に技術を伝承されていた梅原は、京都帝国大学考古学教室の調査と研究を遂行する上で得難い人物になったといえる（穴沢 1994）。

以上のように、ペトリーから濱田と梅原が伝授された型式学的考古学研究法の遂行は、モノにこだわり、その正確な観察と記録を基本とする実証主義的なものであった。梅原は日本に型式学的考古学研究法を植え付ける上で欠かせない存在であったと評価しうる[23]。そして、濱田や梅原のこうした研究姿勢は小牧、藤岡の訓練に反映され、先史地理学研究の

方法論確立に影響を与えた可能性が高い。すなわち、京都大学文学部の実証主義的な歴史地理学研究（水内 2006）を評価するためには、梅原を中心とした考古学研究法の影響に注目する必要があるだろう。次章からは、こうした視点から梅原寄贈地形図について検討を加えていく。

III 梅原末治寄贈地形図の特徴

(1) 対象資料の概要

既述のように、京都大学総合博物館地理作業室には文学部の地理学教室が収集した研究、教育目的の地形図が多数所蔵されている。このコレクションは初代教授の小川が陸軍陸地測量部や地質調査所から講座開設にあたり寄贈を受け文学部陳列館に収蔵されたものに端を発し（京都大学文学部地理学教室 2008: 39-43）、その後も地理学教室が継続的に収集した地形図に加え、各時代の京都大学の教員や関係者が寄贈した地形図を含む。この中に、梅原末治名誉教授により寄贈された一群の地形図が存在した。ただし、これまでに資料の寄贈者ごとに整理や台帳等の記録が残された形跡はなく、教育用の使用目的に対する便利から図幅ごとに他の地形図と混在する形で保存されてきた。そのため、梅原寄贈地形図の全容を確認するためには、まず膨大なコレクションの中からそれらを選別して整理する必要があった。

梅原による寄贈地形図は「寄贈梅原末治名誉教授」印（以下、梅原寄贈印と略する）があるため、これにより区別が可能である（図1）。そこで本稿では梅原寄贈印のあるものを、1/50,000と1/25,000および仮製1/20,000地形図について確認するとともに、整理を行った。なお、調査の結果、関東地方を主な範囲として製作された迅速測図については梅原寄贈印を有するものが皆無であることを確認している。

全体的な特徴として、1/50,000と仮製1/20,000地形図とについては、表面・裏面を問わず、以前の所有者を示す印形や書き込み、加工の痕跡があるものを多数含んでいる。これに対して1/25,000地形図については全体に書き込みや加工のあるものは皆無で、裏面に梅原寄贈印のみが確認される状態であった。

なお、残念ながら梅原寄贈地形図がどのような経緯で受入られたのか、また受入の時期などについては今回の調査で明らかにならなかった。前章で確認した梅原と地理学教室の関係からすると、①陳列館時代より、考古資料は考古学教室に、地理資料は地理学教室で保管する決まりになっていた可能性、②第二次世界大戦後に梅原が先史地理学の講義を担当した際に受け入れた可能性、そして③弟子でもあった藤岡謙二郎を通じて地理学教室に寄贈[24]された可能性などが考えられるが確証はなく、今後のさらなる検証が必要である。

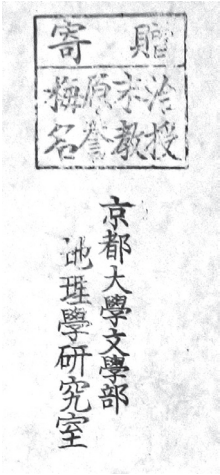

図 1　梅原名誉教授寄贈印

(2) 1/20,000 仮製地形図の地域的分布

まず、収集年代が最も古いと考えられる1/20,000仮製地形図を確認する（表1）。全体の数はのべ41枚で、重複は堺、毛原郷、動木村の３図幅がそれぞれ2枚ずつ存在する。図幅の分布状況についてみると、兵庫県以西を除き、近畿圏をほぼ満遍なく網羅しているといえよう。背面には全て所蔵を示す朱印が押されているが、「梅原」とのみある円形印（梅原1）、「梅原末治」とある円形印（梅原2）、そして「梅原」とある方形印（梅原3）の３種が確認できる（図2）。

次に加工・書き込みについて確認すると、まず南山城にある長池（駅）、木津町、田邊村、高山村の4図幅を除いて全て図面外枠が切り抜かれており、測量年や発行年などの情報が欠落している。携帯の便利のため、地形図をコンパクトにしようとしたものであろうか。また、大阪の図幅のみは右下（南東）箇所8分の一が切り抜かれている。こちらは損傷による欠落の可能性も考えられるが、意図的なものであった場合、当該の範囲を出版物や講義資料などのベースマップに利用したことが考えられるであろう。

書き込みはのべ28図幅に見られるが、内畑村以南の泉州、紀州については根来山を除いて書き込みが見られない。一方、大津、木津町、信太山には景観復原に関わる赤字でのグリッドライン等の書き込みが存在する。この他、特に注目されるのが赤字でぞ

表 1　梅原寄贈 1/20,000 仮製地形図

ID	図幅名	発行年	印形	書き込み・加工
A1	大原村		梅原 2	寂光院などに若干の記述あり。
A2	大津		梅原 1	大津京・崇福寺旧境内復原プラン（赤）、南禅寺境内「鐘楼」「山門」指示、義仲寺・義仲墓記述
A3	陸地測量部二萬分之一図　山城長池	明治 31 年	梅原 3	周囲がカットされていない。飯岡、草内、上井出、多賀村周辺に黒字記述複数あり。長池停車場、中村、奈嶋村付近にも記述複数あり。
A4	陸地測量部二萬分之一図　山城木津町	明治 30 年	梅原 3	周囲がカットされていない。①井平尾村、石寺村付近に記述「此辺高丘をなす」、②河原村周辺に記述「国分寺址」朱雀大路復元案、③木津町、相楽村、上狛村、椿井村、北河原村、平尾村、縞田村、菱田村、下狛村周辺に黒字記述複数あり。④「岩清水文書延久四年官牒に　壱処字稲間庄相楽郡　水田弐拾玖町弐段伍拾歩～」と欄外記述。
A5	淀		梅原 2	今里新地周辺に赤字記述（字西新町）あり、観月橋北詰に「光明帝陵」の記述あり。A9 沓掛村の続きか。
A6	陸地測量部二萬分之一図　山城田邊村		梅原 3	周囲がカットされていない。記述複数あり①各郷名を黒字で書き込み②字岡村周辺「岡眞人和気王に関係なきか」③河原村周辺河原村周辺に「一ノ坪～九ノ坪」「十三堤」
A7	陸地測量部二萬分之一図　山城高山村	明治 25 年	梅原 3	周囲がカットされていない。赤字ルート（星田村～岩船）多々羅村～水取村周辺に黒字記述複数あり。欄外記述「岩面に佛像四体を彫刻す 別の一石にも之を刻す 側に天文十四年の銘あり。」
A8	愛宕山		梅原 1	青字ルート（栂尾、高尾）寺、陵墓の記述あり。桃字ルート（大覚寺）古墳、陵墓、釈迦堂の記述あり。
A9	沓掛村		梅原 2	赤字ルート（① M44.10.14: 石見上里村→粟生村→長法寺、② T2.4.15: 今里新地→粟生村）
A10	山崎村		梅原 2	赤字記述（河陽八幡）（離宮八幡宮を指す）
A11	枚方		梅原 2	赤字ルート（①：高槻停車場→芥川村→氷室塚→至中河原村、② T2.10.26: 私市村→枚方岡新町村、A12 星田村の続きか）「木村一郎氏の所謂継体帝陵」の記述あり。禁野村周辺に記述複数。
A12	星田村		梅原 1	赤字ルート T2.10.26: 木田村→星田村→私市村→村野村、神社古墳等の記述、郡界塗り分け
A13	生駒山		梅原 2	郡界塗り分け
A14	八尾		梅原 2	赤字ルート（八尾停車場～物部守屋墳～大聖勝軍寺～樟木神社～（国分寺へ））ルート上楠木神社、了意橋などの記述あり。郡界を 6 色塗り分け。
A15	国分寺		梅原 2	" 赤字ルート（裏面説明の調査に対応した 7 ルート）、郡界を 6 色塗り分け。 裏面記述 (1)M44.12.7~8：喜田博士に従って調査 (2)M44.12.26~30(3)M45.1.2~6：岩井武俊氏に従い調査 (4)M45.1.27~29：喜田博士、岩井氏に従い調査 (5)M45.3.31~4.8：内 2 日大道弘雄氏案内 (6)M45.7.15~19(7)M45.7.25~30：内 2 日関野・高橋両先生一行案内 "
A16	五條		梅原 2	＊ A14、A15、A21、A20、A22、A16 で同一調査に用いたか。
A17	茨木村		梅原 2	赤字ルート（① T1.11.9: 継体帝陵周辺② T2.3.26: 鎌足公古廟（石）周辺）、他古墳記述あり
A18	吹田村		梅原 2	
A19	大阪		梅原 2	右下 1/8 欠（切り抜き）、郡界塗り分け、国分寺村周辺に記述「鶴満寺（国宝鐘あり）」
A20	天王寺村		梅原 2	赤字ルート（① M45.3.30: 四天王寺周辺、② M45.3.30: 住吉神社周辺（住吉停車場→長持 (？) 石棺露出破壊→甕型塚→住吉神社→住吉停車場））、郡界塗り分け
A21	金田村		梅原 2	赤字ルート（① M45.7.24: 若林村～西本本村、② T1.8.2: 川辺村周辺、③ M45.1.4: 伊賀村→西大塚村→西川村→雄略天皇陵（喜田博士説）、④ M44.1.4: 仁徳天皇陵→反正帝陵→方違神社、⑤ M45.6.17:「発掘日本□□曲玉其他種々の玉類発見…塚廻にて）、郡界塗り分け、○塚廻●山地斜面に多数分布
A22	狭山		梅原 2	郡界塗り分け
A23	尼崎			
A24	天保山		梅原 2	郡界塗り分け
A25	堺		梅原 2	赤字ルート（①：国分村、② M44.1.4: 南宗寺→履仲帝陵→欄外（仁徳陵）へ）
A26	二萬分之一　和泉　堺（新）		梅原 3	遺跡（前田氏遺物所持）：黒鉛筆、赤字ルート（① T3.8.15: 東百舌鳥村→題目堂②：堺東→仁徳陵→浜寺村（すはのもり））、阪堺電車書き込みあり。
A27	信太山		梅原 2	薄い赤鉛筆グリッドライン（上代村周辺）
A28	内畑村		梅原 2	
A29	牛瀧山		梅原 3	
A30	粉川村		梅原 3	
A31	龍門山		梅原 3	
A32	毛原郷		梅原 3	
A33	毛原郷		梅原 2	
A34	生瀬村		梅原 2	
A35	今津村		梅原 2	
A36	日根野村		梅原 3	
A37	根来山		梅原 3	赤線、青線（色鉛筆）の書き込みあり。
A38	岩出郷		梅原 3	
A39	動木村		梅原 3	
A40	動木村		梅原 2	
A41	由良浦		梅原 3、本郷	

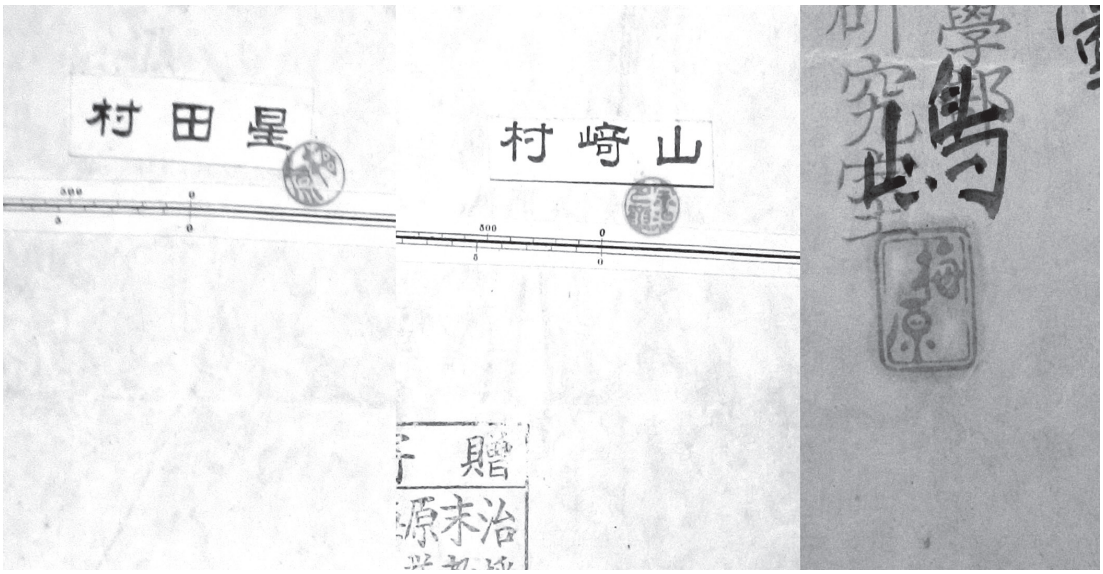

図２　梅原末治所蔵印

注）左より順に梅原１、梅原２、梅原３とする。

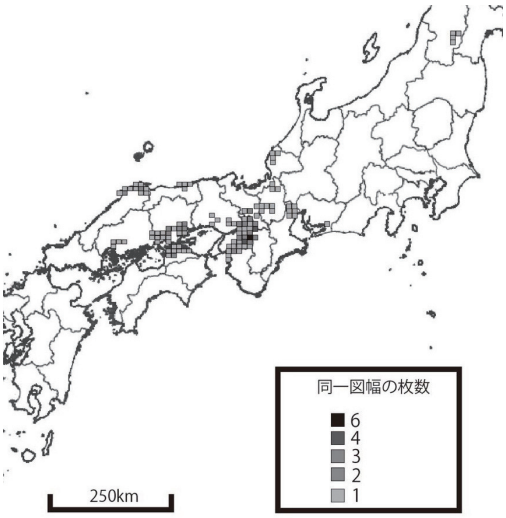

図３　梅原寄贈 1/25,000 地形図の分布域

られた巡検ルートとその説明文であり、これらは12図幅で確認できる。これら巡検に関わる記述内容については次章でさらに検討することとしたい。

(3) 1/25,000 地形図の地域的分布

次に、1/25,000地形図を確認する（図3）。総数はのべ110枚、重複6枚と４枚のものがそれぞれ1図幅、３枚が3図幅、2枚が17図幅となる。基本的に加工や書き込みの痕は確認されず、1/50,000地形図に比較すると枚数が少ない。対応する地域は山形、名古屋、福井、竹生島、近畿、鳥取、松江、岡山、高松周辺が中心で、ほとんど1/50,000地形図が含む範囲と重なる。ただし、丹後地方を除く近畿に複数枚が集中しており、1/50,000地形図では複数枚を擁する図幅が少ないこの地域について補完するものではないかと考えられる。複数枚ある図幅を確認すると、「大和高田」の6枚を筆頭に、「富田林」が4枚、「京都南西部」「伊丹」「奈良」「古市」がそれぞれ3枚、「京都西北部」「田辺」「吹田」「信貴山」「桜井」「堺」「御所」「岩出」がそれぞれ2枚含んでいる。また、松江周辺では「揖屋」「玉造」「出雲今市（今市）」、岡山周辺では「和気」「片上」「備前瀬戸」「総社東部」「倉敷」、高松周辺では「滝宮」にそれぞれ2枚含まれている。

(4) 1/50,000 地形図の地域的分布

最後に、最も枚数が多く、書き込み等の情報量も充実している1/50,000地形図について確認する。全体の数はのべ328枚で、ただし重複4枚のものが2図幅、3枚が8図幅、2枚が38図幅存在する（表2）。

図面への加工ないし書き込みの痕跡について確認する。まず表面を確認すると「福井県立三国中学校」や「鳥取県西伯郡養良実業補習学校」、「鹿児島縣」など梅原以前に当該の地形図を所有した機関に関わる所蔵印のあるものが32枚確認できる。表面の加工・

表 2　梅原寄贈 1/50,000 地形図

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B1	松島	昭和 27 年 6 月 30 日発行 地理調査所			図幅名＜細字＞
B2	仙臺	昭和 27 年 8 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B3	山形	昭和 29 年 8 月 30 日発行 地理調査所		赤字ルート（山形市を中心に放射状のルートが図譜区外まで伸びる）、一部に古墳等の注意書きあり。	図幅名
B4	水戸	明治 42 年 10 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B5	東京 東北部	昭和 22 年 1 月 30 日発行 内務省地理調査所		行政界（村界か？）を赤字でなぞり強調あり	図幅名
B6	東京 東南部	昭和 21 年 8 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B7	大宮	昭和 21 年 8 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B8	東京 西北部	昭和 21 年 9 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B9	東京 西南部	昭和 21 年 10 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B10	横浜	昭和 21 年 8 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B11	横須賀	昭和 22 年 5 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B12	内野	欠		B13 と張り合わせ、図面外切り取り、左縁に「内野」（赤字）の記述あり。	
B13	弥彦	昭和 8 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		B12 と張り合わせ、図面外切り取り、左縁に「弥彦」（赤字）の記述あり。	図幅名
B14	長岡	昭和 9 年 6 月 25 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、左縁に「長岡」（赤字）の記述あり。	図幅名
B15	高田東部	昭和 8 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、左縁に「高田東部」（赤字）の記述あり。	図幅名
B16	高田西部	昭和 8 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、左縁に「高田西部」（赤字）の記述あり。	図幅名
B17	沼津	昭和 8 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、赤字で強調箇所多数、特徴的な山を緑で塗り分け、左縁に「沼津」（赤字）の記述あり。	図幅名
B18	修善寺	昭和 4 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、赤字で強調箇所多数、左縁に「修善寺」（赤字）の記述あり。	図幅名
B19	下田町	昭和 4 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、赤字で強調箇所多数（温泉を含む）、左縁に「下田」（赤字）の記述あり。	図幅名
B20	吉原	昭和 9 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取りの上で二枚（駒越）貼り合わせ、左縁に「吉原」（赤字）の記述あり。	図幅名
B21	清水	昭和 7 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、左縁に「清水市」（赤字）の記述あり。	図幅名
B22	静岡	昭和 7 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、左縁に「静岡」（赤字）の記述あり。	図幅名
B23	神子元島	昭和 3 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、赤字で強調箇所（温泉を含む）、左縁に「神子元島」（赤字）記述あり。	図幅名
B24	掛川	昭和 7 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取りの上で B25、B26 と貼り合わせ、左縁に「掛川」（赤字）記述あり。	図幅名
B25	舩津	昭和 8 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取りの上で B24、B26 と貼り合わせ、左縁に「掛川」（赤字）記述あり。	図幅名
B26	高山	昭和 7 年 10 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取りの上で B24、B25 と貼り合わせ、左縁に「掛川」（赤字）記述あり。	図幅名＜細字＞
B27	飛騨古川	昭和 7 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		国府村、小鷹利村周辺の古墳群の記述あり。欄外に説明あり「古墳ノ位置ハ上広瀬小学校編ノ史蹟広瀬古墳ニ依ル」。	図幅名
B28	三日町	昭和 7 年 10 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		欄外に、「飛騨古川」図幅に含まれる吉城郡国府村、小鷹利村の古墳に関する説明文あり「吉城郡国府村大字広瀬鴻峠口古墳（前方後円墳）横穴式石室あるもの」「小鷹利村大字信包　前方後円墳にて石室あり　仝鷹野字水上高に石室の構造面白シ　仝光妻寺裏古墳」。	図幅名＜細字＞
B29	加子母	昭和 10 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、県境に赤字、湯川温泉に赤強調、左縁に「加子母（岐、長）」の記述あり。	図幅名
B30	下呂	昭和 11 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B31	金山	昭和 11 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B32	金山	昭和 11 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、金山町および鉄道（線名と駅）に赤強調、左縁に「金山（岐阜）」の記述あり。	図幅名
B33	美濃太田	昭和 22 年 2 月 28 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B34	美濃太田	昭和 11 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		古墳および出土品の記述多数、「林魁一氏邸」の記述あり。	図幅名＜細字＞
B35	美濃太田	昭和 11 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、太田町および鉄道（線名と駅）、ライン遊園に赤強調、河川を青着色、左縁に「美濃太田（岐、愛）」の記述あり。	図幅名
B36	三河大野	昭和 7 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面外切り取り、左縁に「三河大野（愛、静）」の記述あり。	図幅名

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B37	瀬戸	昭和 7 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B38	挙母	昭和 7 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B39	三国	昭和 8 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	福井県立三国中学校	三国中学校印に青字で「38/42」の記述が添えられている。	図幅名
B40	福井	大正 2 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B41	福井	（昭和 8 年要部修正測図）参謀本部			図幅名
B42	美濃町	昭和 4 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B43	岐阜	昭和 10 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		一部の地名に強調、欄外２箇所に注意書きあり「坂祝村火塚古墳　大字坂倉字西稲葉上円下（？）古墳石室あり」「伊吹　山田寺阯」。	図幅名
B44	大垣	大正元年 8 月 15 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B45	大垣	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B46	近江長浜	昭和 22 年 2 月 28 日発行 地理調査所			図幅名
B47	鯖江	大正 2 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B48	今庄	大正 2 年 10 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	赤字ルート（立石岬、敦賀湾西岸～馬脊峠）、立石岬周辺に記述多数あり。	図幅名
B49	敦賀	大正 2 年 10 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B50	名古屋北部	昭和 10 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		色鉛筆でのチェック箇所複数（赤、黄、緑）、欄外下部に注意書き、及白山神社、二子山のスケッチ。	図幅名＜細字＞
B51	名古屋南部	昭和 10 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		色鉛筆でのチェック箇所複数（赤、黄、緑）。	図幅名＜細字＞
B52	半田	昭和 21 年 1 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B53	師崎	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B54	津島	昭和 21 年 1 月 30 日発行 内務省地理調査所		駒野周辺に貝塚、古墳の記述複数あり。	図幅名
B55	桑名	大正 12 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		色鉛筆でのチェック箇所複数（赤、青）、欄外上部に注意書きあり（鉛筆書き・判読困難）。	図幅名、昭和 22 年 7 月 26 日伊東富太郎氏恵贈
B56	桑名	昭和 21 年 11 月 30 日発行 地理調査所		緑の色鉛筆によるチェック箇所複数、県境を赤で強調。	図幅名
B57	四日市	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所		欄外上部に「顕上寺」および「糠塚横穴式古墳」に関する鉛筆書きの注記「鈴鹿市加佐登町 寺ニアリ 銅鐸四五個アリ」。	図幅名
B58	津市	大正 8 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B59	津東部	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B60	彦根東部	昭和 21 年 12 月 28 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B61	御在所山	昭和 21 年 12 月 28 日発行 内務省地理調査所			図幅名＜細字＞
B62	亀山	昭和 21 年 12 月 28 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B63	長野峠	大正 8 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B64	彦根西部	昭和 8 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B65	八幡町	明治 33 年 12 月 25 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	赤字ルート（八幡駅→安土山）、欄外左上部に汽車時刻表「二十二日夕京都発　福井着三時ー、四時ー、五時ー」、欄外下部に遺跡の注記複数あり。	図幅名＜細字＞
B66	水口	明治 33 年 12 月 25 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	外上部に考古遺跡の注記あり（鉛筆）。	図幅名
B67	水口	大正 13 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤字ルート、稜線上のピークを赤強調、行政界青強調あり。	図幅名
B68	上野町	明治 33 年 12 月 25 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B69	上野町	明治 33 年 12 月 25 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	欄外下部に鉛筆書き注記「此辺家形埴輪出土」あり。	図幅名
B70	上野	大正 14 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤字ルート、稜線上のピークを赤強調、考古遺跡、遺物の鉛筆書き注記あり。	
B71	答志	（大正 9 年修正測図） 参謀本部	内務省地理調査所		図幅名
B72	松坂町	大正 8 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B73	大村	大正 9 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B74	名張	昭和 7 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤目口駅周辺に古墳等の黒ペン書き込み、上部欄外に名張町周辺の古墳等の鉛筆書き書き込み多数、行政界毎に色の塗り分けあり。	図幅名
B75	西津村	明治 42 年 7 月 20 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B76	熊川村	明治 34 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B77	小濱	昭和 21 年 6 月 25 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B78	小濱町	大正 3 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B79	由良ケ嶽	昭和 21 年 6 月 25 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B80	舞鶴	昭和 21 年 6 月 25 日発行 内務省地理調査所		古墳記述（古墳（埴輪土偶））あり。	図幅名
B81	網野	昭和 21 年 5 月 25 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B82	網野	昭和 21 年 5 月 26 日発行 内務省地理調査所			図幅名＜細字＞
B83	宮津町	昭和 5 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		切り抜きあり。	図幅名
B84	宮津	昭和 21 年 5 月 25 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B85	大江山	昭和 5 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		切り抜き後、元に戻して裏紙を当てた修正痕あり。	図幅名
B86	奈良	昭和 26 年 7 月 30 日発行 地理調査所		孝謙天皇陵北東に赤 × 印あり。	
B87	奈良	大正 5 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B88	奈良	大正 3 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名、鉛筆書きのメモ「山田字相和より平城村小学校に通ずる小径のスグ東カザハヒ（？）山陵を東にアル」「延徳三年辛亥十一月十六日　西会　真照」「十三連塔」（碑文筆写？）
B89	知井村	明治 35 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B90	四ツ谷	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B91	京都 西北部	大正 5 年 2 月 28 日 大日本帝国陸地測量部		赤字ルート（西加茂、高雄、亀岡）、寺（密厳寺）、寺社	図幅名
B92	大阪 東北部	大正 3 年 9 月 30 日 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名、大正三年十一月二十三日蘆田伊人氏所贈
B93	綾部	大正 14 年 6 月 30 日発行 陸地測量部 参謀本部			図幅名
B94	園部	昭和 21 年 12 月 28 日発行 内務省地理調査所			図幅名＜細字＞
B95	広根	昭和 23 年 1 月 30 日発行 地理調査所			図幅名＜細字＞
B96	大阪 西北部	昭和 6 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名、大正三年十一月二十三日蘆田伊人氏所贈
B97	福知山	昭和 3 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		古墳記述「古墳（佐賀小学校裏　昭二四・夏遺物出土」、切り抜き後、元に戻して裏紙を当てた修正痕。	図幅名
B98	篠山	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B99	神戸	大正 3 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B100	櫻井	昭和 4 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸一測量部			図幅名＜細字＞
B101	櫻井	大正 3 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B102	吉野山	大正 2 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤字ルート（畝傍山周辺の陵墓）、黒ペンのメモ書き（周辺陵墓）。	図幅名
B103	大阪 東南部	昭和 4 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B104	大阪 東南部	昭和 4 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		切り抜きあり。	

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B105	大阪 東南部	大正 3 年 9 月 30 日 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名、大正三年十一月二十三日蘆田伊人氏所贈
B106	五條	昭和 3 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B107	五條	大正 8 年 12 月 28 日 大日本帝国陸地測量部			
B108	高野山	大正 2 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	赤字ルート（高野口駅〜高野山弘法大師殿〜轉軸山）。	図幅名
B109	大阪 西南部	大正 3 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名、大正三年十一月二十三日蘆田伊人氏所贈
B110	岸和田	昭和 12 年 4 月 30 日発行 陸地測量部参謀本部	内務省 地理調 査所		図幅名
B111	岸和田	大正 6 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		鉛筆書きのメモ「北信達村林昌寺　信達村の十山の脇十谷ニテ明治三十六年三月発見」	図幅名
B112	粉河	昭和 21 年 8 月 30 日発行 内務省地理調査所		数カ所にチェックあり。欄外に説明文（鉛筆）あるも判読不能。	図幅名
B113	和歌山	昭和 21 年 9 月 30 日発行 内務省地理調査所		有効村周辺に記述数カ所あり。和歌山市内に「谷井氏邸」の記述あり。	図幅名
B114	田邊	大正 3 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		数カ所に × 印黒●などのチェックあり。天神崎の先端に説明文「洞窟製（？）塩器多数に出土」あり。	図幅名
B115	御坊	昭和 11 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B116	出石	明治 44 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		日高村周辺の遺跡の記述多数、欄外に国分寺礎石のスケッチ図あり。	図幅名
B117	村岡	昭和 10 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B118	濱坂	大正 4 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		浦富村周辺の対象地域を囲う赤字の枠線、周辺の山城跡を赤字で記述、本庄村の石棺(鉛筆）あり。	図幅名
B119	若櫻	昭和 9 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B120	若櫻	昭和 9 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		宇部野村周辺の字名に数カ所強調、欄外に説明文（鉛筆）「新井ノ石ノ冊ノ上七号目位ニ石ガマアリ松尾ニモ石ガマアリト云フ」あり。	図幅名
B121	鳥取北部	昭和 9 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B122	鳥取北部	昭和 9 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		鳥取南部と貼り合わせ、湖山池周辺の出土物の記述あり（鉛筆）。	図幅名
B123	鳥取南部	昭和 9 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		鳥取北部と貼り合わせ、鳥取市周辺の寺、寺阯の記述（黒ペン）の記述あり。	
B124	鳥取南部	昭和 9 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B125	竹田	明治 44 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B126	北條	昭和 3 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤字ルート（小野町周辺）、青字ルート（下里村周辺）、ルート周辺の考古遺跡に関する注記あり。	図幅名
B127	北條	昭和 3 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B128	高砂	昭和 22 年 5 月 30 日発行 内務省地理調査所		赤字ルート（二見村〜明石）、ルート周辺の考古遺跡に関する注記（「鏡出土」）あり。	図幅名
B129	大屋市場	昭和 9 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B130	龍野	大正 8 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B131	姫路	大正 8 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B132	和気	昭和 2 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		太田村周辺に「丸窯」の記述あり。	図幅名＜細字＞
B133	和気	昭和 26 年 5 月 30 日発行 地理調査所		切り抜きあり（豊田村周辺）。	
B134	和気	大正 2 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		西高月村（左部）、美和村（下部）周辺にそれぞれ古墳の注記複数あり。	図幅名
B135	明石	昭和 21 年 9 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B136	明石	昭和 22 年 6 月 30 日発行 地理調査所			図幅名＜細字＞
B137	洲本	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所		加茂村、松帆村周辺の考古遺跡、遺物の注意書き複数個所あり。	図幅名
B138	由良	昭和 21 年 6 月 25 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B139	鳴門海峡	昭和 21 年 6 月 25 日発行 内務省地理調査所		津井村に「隆泉寺」の記述あり。	図幅名
B140	徳島	昭和 23 年 2 月 28 日発行 地理調査所			図幅名

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B141	三本松	昭和 22 年 3 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B142	川島	明治 22 年 2 月 28 日発行 地理調査所			図幅名
B143	西大寺	昭和 7 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		弥生式貝塚、縄文式貝塚の分布、その他銅鐸等の出土物の記述多数あり。	図幅名
B144	高松市	大正 4 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B145	志度	明治 34 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	考古遺跡、遺物のチェック多数（鉛筆書き）あり。	図幅名
B146	志度	昭和 23 年 5 月 30 日発行 地理調査所		鉛筆書きあり「下井戸村押光寺ヨリ移ル」。	図幅名
B147	脇町	昭和 23 年 1 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B148	阿波富岡	昭和 23 年 4 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B149	奈半利	明治 43 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B150	浮津	明治 42 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B151	西郷	大正 4 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	西郷町周辺の遺跡、遺物に注記あり。	図幅名
B152	北方	大正 4 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B153	菱	大正 4 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	遺跡、遺物、寺社に注記あり。	図幅名
B154	浦郷	大正 3 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	遺物 (「土器出ズ」) に注記あり。	図幅名
B155	倉吉	昭和 9 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B156	赤崎	明治 44 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		遺構、遺物の記述（＋の書き込み）多数（「細工塚　玉類多シ」「築地峰」など）あり。	図幅名
B157	大山	大正 2 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		大山西北麓に古墳の分布数カ所の記述あり（「○完全ナルモノ」「◉露出古墳」（赤字）。	図幅名
B158	大山	昭和 9 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B159	美保関	昭和 11 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B160	米子	明治 44 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	古墳、石器等の出土物の記述多数、赤点の分布、「名和氏祖先墓」、欄外説明書き「石器は古墳所在地より多く出ず、但大山方面迄も出ず教布地也」。	図幅名
B161	米子	明治 44 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		遺構、遺物の記述（＋の書き込み：赤崎と同じ）多数、欄外注意書き「人骨 6 人分同時に発掘」。	図幅名
B162	米子	明治 44 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鳥取県西伯郡養良実業補習学校	古墳の分布数カ所の記述あり（「○完全ナルモノ」「◉露出古墳」（赤字：B157 と同じ）。	図幅名、山崎正一氏（鉛筆書き）
B163	米子	昭和 12 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		等高線塗り分け、欄外に記述「文学科地歴科壱年貳拾七番　樋口彦哉」あり。	図幅名＜細字＞
B164	境	昭和 12 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B165	松江	明治 44 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	寺社、寺趾、古墳多数記述。松江市内人名（「福井賢二郎」「長谷川愛雄（古物を蔵す）」）記述。	図幅名
B166	松江	昭和 12 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B167	奥津	昭和 8 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		郡名、郡界に赤字で強調。	図幅名
B168	津山西部	昭和 9 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		図面中央の芳野村に × 印、周辺を切り抜いた後、裏紙を当てて修復した痕跡あり。	図幅名
B169	岡山北部	大正元年 8 月 30 日発行 大日本陸地測量部		国分寺跡、古墳、出土品等多数記述。	図幅名
B170	岡山北部	昭和 4 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		一箇所に前方後円墳の形態を書き込みあり。	図幅名＜細字＞
B171	湯本	昭和 8 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		郡名、郡界を赤字で強調あり。	図幅名
B172	高梁	昭和 9 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B173	根雨	明治 34 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		古墳の分布 2 カ所の記述あり（「○完全ナルモノ」「◉露出古墳」（赤字：B157 と同じ）。	図幅名
B174	根雨	昭和 8 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B175	上市	明治 34 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		古墳の分布 7 カ所の記述あり（「○完全ナルモノ」「◉露出古墳」（赤字：B157 と同じ）。	図幅名
B176	上石見	昭和 9 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B177	横田	昭和 8 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B178	多里	昭和 9 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B179	岡山南部	昭和 4 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		堀中温泉、貝塚、銅鐸等数カ所記述、「永山氏邸」、数カ所赤点あり。	図幅名＜細字＞
B180	丸亀	明治 44 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B181	玉嶋	明治 44 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	赤字ルート（玉嶋駅～東三成）、ルート上の寺社、塚、墓など記述あり。	図幅名
B182	玉島	昭和 4 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		塚、寺社、貝塚、古墳、瓦窯等複数箇所記述、欄外説明書き「長福寺　塚多シ開墾ノ際石棺発見勾玉土器多シ」。	図幅名
B183	玉島	昭和 4 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B184	寄島	昭和 5 年 8 月発行 大日本帝国陸地測量部		貝塚、古墳、遺跡等複数箇所記述あり。	図幅名
B185	観音寺	大正 3 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B186	観音寺	昭和 7 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B187	井原	昭和 4 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		銅鐸出土地、縄文貝塚等記述あり。	図幅名
B188	福山	昭和 4 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		古墳、遺跡複数箇所（× 印）、海中からの出土物等記述あり「コノ海中ヨリ大志祝部の甕出ヅ（昭和 24 年秋）」。	図幅名
B189	福山	昭和 4 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		津之郷村周辺に調査記録あり「11.6.28 調査　竪穴式棺　唐鏡出土」。	図幅名＜細字＞
B190	股嶋	明治 40 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B191	府中	昭和 10 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B192	府中	昭和 21 年 1 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B193	尾道	昭和 8 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B194	今治東部	昭和 6 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤で面（内部斜線）と赤丸の書き込みが複数存在。	
B195	三嶋	明治 41 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3		図幅名
B196	本山	昭和 11 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B197	西條	昭和 11 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤で面（内部斜線）と赤丸、赤二重丸の書き込みが複数存在。	
B198	今市	明治 35 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	来待村周辺に石棺に関する書き込み２箇所（鉛筆）、今市町周辺に古墳、遺跡、墓など複数書き込み（黒ペン）。	図幅名
B199	杵築	明治 34 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	出雲大社本殿、境内に「銅剣、勾玉出土遺跡」の記述あり。	図幅名
B200	大社	昭和 11 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		欄外に「妙蓮寺古墳」、「放山古墳」の記述（鉛筆）あり。	図幅名＜細字＞
B201	木次	昭和 22 年 3 月 31 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B202	石見大田	（昭和 7 年修正測図） 参謀本部			図幅名
B203	竹原	昭和 4 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		下北方村周辺に「石棺ノ二個アル古墳」の記述、上欄外に見取り図および「33×57」の記述あり。	図幅名＜細字＞
B204	松山北部	昭和 6 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		北條町、松山市周辺に赤で面（内部斜線）と赤丸赤 × 印の書き込み多数。	
B205	松山南部	昭和 8 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		松山市、小野村、北吉井村、荏原村、南伊予村周辺に赤で面（内部斜線）と赤丸赤 × 印の書き込み多数。	
B206	久万	昭和 11 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B207	柞原	昭和 11 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B208	三津濱	昭和 6 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		三津浜町周辺に赤で面（内部斜線）と赤丸赤 × 印の書き込み多数。	
B209	郡中	昭和 9 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		南伊予村、郡中町周辺に赤で面（内部斜線）と赤丸赤 × 印の書き込み多数。	
B210	大洲	昭和 11 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B211	卯之町	昭和 11 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B212	青島	昭和 5 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B213	伊豫長濱	昭和 11 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B214	柳井津	明治 35 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		鉛筆注意書き数カ所あり「和銅鉾発掘地」、「弥生式包含層」「水口」。	図幅名
B215	田野々	昭和 11 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B216	宇和島	昭和 11 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B217	岩松	昭和 11 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			
B218	三田尻	明治 35 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B219	山口	明治 44 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		神社、館趾、古墳等記述あり。	図幅名
B220	小郡	明治 44 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B221	室積	明治 35 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		記述あり「にじがはま」。	図幅名
B222	佐賀関	昭和 21 年 9 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B223	臼杵	昭和 21 年 9 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B224	臼杵	昭和 29 年 8 月 30 日発行 地理調査所			
B225	佐伯	昭和 22 年 7 月 25 日発行 地理調査所			図幅名
B226	大分	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B227	犬飼	昭和 21 年 9 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B228	別府	昭和 22 年 5 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B229	森	昭和 22 年 6 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B230	延岡	昭和 10 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B231	延岡	昭和 10 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B232	富高	昭和 10 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B233	富高	昭和 10 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B234	都農	昭和 15 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B235	都農	昭和 15 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B236	高鍋	大正 15 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B237	高鍋	昭和 11 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B238	高鍋	昭和 11 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤字ルート（高鍋駅～上江村～富田村・三納代駅～）、上江村付近に塚、横穴の記述数カ所あり。	図幅名
B239	尾鈴山	昭和 15 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B240	妻	昭和 12 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		上三財に「古墳」、上穂北村に「横穴群」の記述あり。	図幅名
B241	妻	昭和 12 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤字ルート（三納代駅続き～尾原～）。記述多数あり「守屋氏ノ馬具ココヨリ出土スト云フ」「塚（30）」「住居趾」「六野原八代古墳群」「昭和 14 年頃川石ヲ以テ作レル横穴式石室出ヅ墳形ナシ破壊セリ金環刀祝部出ヅ」。	図幅名
B242	宮崎	明治 37 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	赤字ルート（宮崎～柏田～蓮池～村角～新別府～宮崎）、鉄道線の書込み、記述多数「此辺ニモ横穴アリ」「横穴」「大ヶ城塚」「瓢箪墳」「石鏃」「石鏃」「此辺横穴四五十あり」。	図幅名＜細字＞
B243	宮崎	昭和 12 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		記述数カ所あり「縄文弥生式土器」「縄文土器」「（瀬ノ口氏□？）此ノ丘陵上ニ山上古墳アリ前方後円形ヲナシ埴輪円筒アリト」（下北型北方の山上）「古墳群」「縄文土器□？」。赤点数カ所あり。	図幅名
B244	宮崎	昭和 12 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B245	日向青島	昭和 11 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B246	飫肥	昭和 12 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B247	野尻	昭和 12 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名
B248	都城	昭和 12 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B249	末吉	昭和 11 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	記述 1 箇所あり「石器」。	図幅名

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B250	小倉	昭和 21 年 10 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B251	行橋	昭和 21 年 10 月 30 日発行 地理調査所			図幅名
B252	吉井	昭和 9 年 5 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		記述 1 箇所あり「松屋」。	図幅名＜細字＞
B253	折尾	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B254	直方	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B255	直方	昭和 29 年 10 月 30 日発行 地理調査所		青字ルート（通堂〜平井〜田熊〜田島村・宗像神社）、記述あり。	
B256	太宰府	昭和 7 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		黒字ルート（大城山）ルートに沿って記述あり。黒字ルート（ささくり駅→ふたせ駅→ながを駅：昭 10・12・20 午後）、ルートに沿って × 印あり。	図幅名
B257	甘木	昭和 6 年 10 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		記述複数「田中氏邸」「甕棺埋没地」「浮羽中学校」「浮羽女学校」「横穴式石室甲冑等出ヅ朝倉中□□」「弥生式遺跡」「□田寺趾」「五郎山古墳」「塔の原廃寺」。	図幅名＜細字＞
B258	沖島	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所		記述複数あり丸隈山古墳」「高宮八幡」「五銖出土」「横穴式古墳（大形）」「前方後円墳」	
B259	神湊	昭和 26 年 11 月 30 日発行 地理調査所			
B260	津屋崎	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所		青字ルート（勝浦〜宮地岳神社〜とうのはる駅）記述あり「骨壺出土」「古墳」「古墳」「大石神社　高サ十尺厚サ二尺位ノ扁平ナル大石神体トナリ社殿ノ下ヨリ屋根マデ通ジテ立ツト云フコノ社殿ノ背後ニ銅戈ノ出土セル甕棺残存スト云フ（森氏）」。花見駅、鉄道線を書き込み。	図幅名
B261	福岡	明治 37 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	記述あり「鏡、玉類、瓶と共に同県発掘」。	図幅名＜細字＞
B262	福岡	昭和 21 年 12 月 28 日発行 地理調査所		記述あり。	図幅名
B263	前原	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所		赤字で行政界を強調、記述多数あり（古墳、出土物など）、欄外に石棺の説明とスケッチ。	図幅名
B264	濱崎	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所		赤字で行政界を強調、記述多数あり（古墳、出土物など）、濱崎町周辺に切り抜き後、元に戻して裏紙を当てた修正痕あり。	図幅名
B265	日田	昭和 9 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		古墳などの記述複数あり。「安元進氏（中川原）」	図幅名＜細字＞
B266	御船	明治 35 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	赤字ルート（健軍〜六嘉村井寺）記述あり「彫刻彩色ある古墳」。ピンクの強調。	図幅名＜細字＞
B267	久留米	明治 37 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	赤字ルート（久留米〜御井町〜国分村〜鳥飼村）、高良山周辺に強調あり。赤字ルート（西牟田村〜長峰村吉田〜福嶋〜長濱）	図幅名＜細字＞
B268	久留米	昭和 6 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤字で行政界を強調、記述多数あり（古墳、出土物など）。	図幅名＜細字＞
B269	久留米	昭和 6 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		黒字ルート（福島町→新溝→羽犬塚町）、記述複数あり（寺社、古墳等）。	図幅名
B270	山鹿	昭和 6 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B271	高瀬	昭和 6 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		記述複数あり（古墳等）。	図幅名＜細字＞
B272	熊本	明治 34 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	地名と行政界を赤字と青字で強調。土器、貝塚等の記述複数あり。	図幅名＜細字＞
B273	熊本	昭和 6 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		古墳、出土物などの記述多数あり。	図幅名＜細字＞
B274	熊本	昭和 34 年 1 月 30 日発行 国土地理院			
B275	佐賀	明治 35 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	梅原 3	赤字ルート（御井町〜一本松〜久留米）、記述あり。	図幅名＜細字＞
B276	佐賀	昭和 6 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		黒字ルート（羽犬塚町→酒見・風浪宮→大善寺町→津福町：昭和 10 年 12 月 29 日）	図幅名＜細字＞
B277	佐賀	昭和 6 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B278	佐賀	昭和 37 年 6 月 30 日発行 国土地理院			
B279	大牟田	昭和 6 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		記述 1 箇所あり。	図幅名＜細字＞
B280	長洲	昭和 9 年 6 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部			図幅名＜細字＞
B281	武雄	昭和 37 年 1 月 30 日発行 国土地理院			
B282	鹿島	昭和 37 年 6 月 30 日発行 国土地理院			
B283	人吉	昭和 16 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤、青字の強調あり、赤点、赤 × 印の記述あり。古墳など記述多数あり「細形銅剣出土（七寸位）熊本市専□□亀居正□氏蔵」。	図幅名＜細字＞
B284	加久藤	昭和 12 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島 縣	行政界（姶良郡界）を赤で強調。	図幅名
B285	八代	昭和 36 年 1 月 30 日発行 国土地理院			

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B286	大口	（10 年部分修正測図）参謀本部			図幅名、森奥次郎氏寄贈図
B287	大口	昭和 12 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	行政界（郡界）を赤で強調。赤、青点に記述多数（墳、山名と出土物等）。	図幅名
B288	水俣	昭和 15 年 10 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤点に記述数カ所あり（土器、貝塚等）。	図幅名＜細字＞
B289	出水	昭和 11 年 11 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	行政界・郡界を赤で、町村界を青で強調。	図幅名
B290	牛深	昭和 15 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B291	阿久根	昭和 12 年 4 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	行政界・郡界を赤で、町村界を青で強調。	図幅名
B292	霧島山	昭和 11 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	行政界（郡界）を赤で強調。	図幅名
B293	国分	昭和 11 年 10 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	記述数カ所あり「大正館」「国分寺趾」「縄文式遺跡軽石製ノ石土偶出土」。	図幅名
B294	岩川	昭和 11 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B295	鹿屋	昭和 11 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	赤字ルート（国分〜花岡村〜鹿屋町〜姶良村〜高山町、志布志〜野方村）、ルートに沿って記述多数あり（古墳、遺跡、石棺、寺社、その他「宮冨小学校」「波野小学校」、赤点の分布複数、郡界を青で強調。	図幅名
B296	栗野	昭和 11 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	行政界･郡界を赤で、町村界を青で強調。赤点、記述（土器片、遺跡など）数カ所あり。	図幅名、鉛筆書きの石室見取り図（平面図と断面図、「明治頃出土墳ヨリ出ヅ」）
B297	加治木	昭和 11 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	村界を青で強調。記述多数あり（古墳､遺跡､その他「弥生式包含層」､「慶長十一年の石橋」「日木山洞窟」「遺跡押型文土器アリ」「環状石斧出ヅ」）	図幅名
B298	鹿児島	昭和 11 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	黒丸､赤丸､赤点の分布､鹿児島市北東と桜島北西部に記述多数あり「縄文遺跡マンロー発掘」「重弧文土器」。	図幅名
B299	垂水	昭和 11 年 7 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部		赤字ルート（国分〜垂水〜新城村〜）、ルート上の 1 箇所記述「遺跡」あり。	図幅名＜細字＞
B300	宮之城	昭和 11 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	行政界（郡界赤、村界青）強調。川内町（市に修正）周辺に記述複数鉛筆「佐日野横岡古墳群」「濱田伝？次氏」「部落ノ西古墳群」。赤丸 1 箇所。	図幅名
B301	川内	昭和 11 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	村界を青で強調。黒 × 印、赤点分布。記述多数あり（古墳、遺跡、その他「弥生式包含地帯」「国府阯」「貝塚」）	図幅名
B302	伊集院	昭和 11 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	郡界を赤、村界を青で強調。	図幅名
B303	川邊	昭和 11 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	郡界を赤、村界を青で強調。記述多数あり（貝塚、古墳、遺跡、縄文土器など）「大石アリ（子産ム石ト云フ）触レルトタタリアリト云フ､凹石多ク□□リ（□□川ニ出ヅ）」。	図幅名
B304	西方	昭和 12 年 3 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B305	羽嶋	昭和 11 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B306	野間嶽	昭和 12 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	赤に青点で何らかの分布を記録、記述多数「大石ノ下ヨリ石斧出土」、「林家」（片浦）。	図幅名
B307	内之浦	昭和 12 年 2 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B308	大根占	昭和 12 年 1 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	村界を青で強調。赤字ルート（上名〜吾平山上陵）、村界を青で強調。記述多数あり（貝塚、古墳、遺跡、縄文土器など、「弥生式土器」「弥生式土器包含地」「鵜戸神社　御神体ハ漢式鏡ナリ」）。	図幅名
B309	邊塚	昭和 11 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B310	開聞嶽	昭和 9 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部		鉄道線の書き込み？記述あり「貝塚」	図幅名
B311	開聞嶽	昭和 11 年 12 月 28 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	黒字ルート（穎娃〜山川港〜十町）、黒塗、記述あり（土器、出土物等）「鐵剣伴出弥生式土器包含地」、「鞴ノ口鐵器出土弥生式土器伴出」。	図幅名、昭和十九年一月十六日穎娃遺跡調査
B312	佐多岬	昭和 11 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B313	枕崎	昭和 11 年 9 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣	村界を青で強調。記述複数あり「モリゾンドン」「砂鉄出ヅ」「塚高立六尺」。	図幅名
B314	坊	昭和 11 年 8 月 30 日発行 大日本帝国陸地測量部	鹿児島縣		図幅名
B315	泉	昭和 12 年 9 月 25 日発行 陸地測量部参謀本部	軍事極秘（戦地ニ限リ極秘）（上辺に赤塗）		図幅名、森貞次郎君寄贈本
B316	佐須奈	昭和 12 年 10 月 25 日発行 陸地測量部参謀本部	軍事極秘（戦地ニ限リ極秘）（上辺に赤塗）		図幅名

ID	図幅名	発行年月日／発行所	印形	表面書き込み・加工	裏面書き込み・加工
B317	仁位	昭和 12 年 10 月 25 日発行 陸地測量部参謀本部	軍事極秘（戦地ニ限リ極秘）（上辺に赤塗）	行政界赤強調。赤字ルート（海上）、記述多数（銅鐸、塚、古墳、土器片等）、「平山耶太郎氏（五十才）」。	図幅名
B318	厳原	昭和 11 年 8 月 25 日発行 陸地測量部参謀本部	軍事極秘（戦地ニ限リ極秘）（上辺に赤塗）	行政界赤強調。赤字ルート（雞知町周辺）、記述あり（古墳、銅鐸等）「土器破片出ヅ大浦幸太郎□□」「カイガラ畑アリト云フ銅鐸アリト云フ」。	図幅名
B319	久和	昭和 11 年 8 月 25 日発行 陸地測量部参謀本部	軍事極秘（戦地ニ限リ極秘）（上辺に赤塗）		図幅名
B320	小茂田	昭和 11 年 10 月 25 日発行 陸地測量部参謀本部	軍事極秘（戦地ニ限リ極秘）（上辺に赤塗）	行政界赤強調。記述多数あり「鏡三面アリ」左欄外「尾崎　早田氏大船石□□ヲ所持ス」。	図幅名
B321	豆酘	昭和 11 年 8 月 25 日発行 陸地測量部参謀本部	軍事極秘（戦地ニ限リ極秘）（上辺に赤塗）		図幅名
B322	勝本	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B323	蘆邊	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B324	郷ノ浦	昭和 12 年 9 月 25 日発行 陸地測量部参謀本部			図幅名
B325	呼子	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B326	唐津	昭和 21 年 10 月 30 日発行 内務省地理調査所		唐津市周辺に記述多数あり「縄文式土器　櫛目文式土器出土」「古墳」「旧文石墓所在」。	図幅名
B327	平戸	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名
B328	佐世保	昭和 21 年 11 月 30 日発行 内務省地理調査所			図幅名

書き込みについては、のべ157図幅にのぼる。この内、仮製地形図の場合と同様に巡検記録と思われる順路の記述があるものが28図幅となる。また、切り抜きなどの加工があるものは26枚あり、内19枚は図面外の図幅名、凡例などを切り落としたものであり、残りの7枚については図面内の箇所を一度切り取った後、裏側から原稿用紙などを裏紙に貼り合わせて修復したものである（図4）。前者については1/20,000仮製地形図と同様、地形図を携帯する便利を考慮したものではないかと考えられる。後者については、図面内の一部を講義資料や出版物中の図版作成に使用したものではないかと推測される。

一方、裏面についてみると、「梅原」方形印（梅原3）のあるものが39図幅存在する。また裏面に加工・書き込みのあるものはより多く、のべ288図幅に達する。ただし、そのほとんどが図幅名を所蔵者が整理の便宜上書き写したものであり、当該の地域に関わる調査情報などの書き込みは限られる。ただし、7図幅については梅原以前の所蔵者と思われる人物に

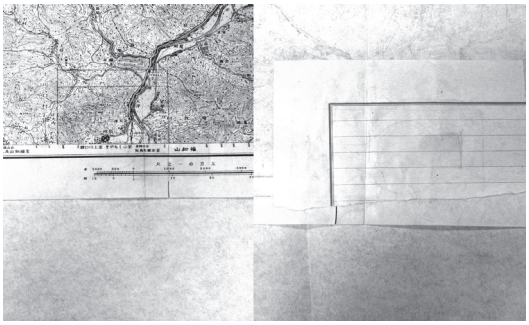

図 4　切り抜き加工の痕跡

注）「大江山」（B85）の左が表面より、右は裏面より一部抜粋

関する記述が認められることに注意が必要である。

つづいて梅原寄贈印のある1/50,000地形図の地域分布を検討する（図5）。全体に東日本は少ないが、仙台・山形、東京、茨城、新潟、伊豆・駿河周辺に図幅ごとに1枚ずつ存在する。中部地方は尾張・伊勢・飛騨・美濃に数多く、「美濃加茂（美濃太田）」、「上野」、「金山」、「大垣」、「水口」、「津東部」の図幅は複数枚

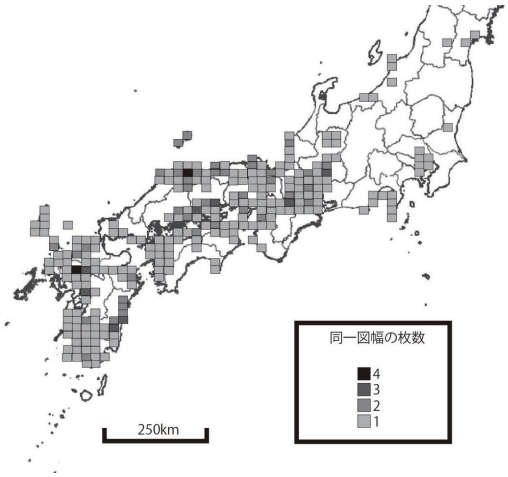

図 5　梅原寄贈 1/50,000 地形図の分布域

含まれる。また、越前にも多く含まれ、「福井」には２枚存在する。逆に近畿地方には複数枚含む図幅が少なく、「北条」、「明石」、「岸和田」がそれぞれ2枚ずつ含むのみで、大和、丹後、摂津といった考古遺跡の多い地域の図幅がそれぞれ1枚しか含んでいない。これは、この地方の図幅が仮製図や1/25,000図に数多く含まれるためと考えられる。

中国地方ではまず出雲、伯耆に数多く存在する。特に、「米子」、「松江」、「大社」、「根雨」、「上石見」、「鳥取南部」、「若桜」はそれぞれ複数枚存在する。なお、隠岐島にも「西郷」、「浦郷」の図幅ともに2枚ずつ含んでいる。また、備中、備前や讃岐にも数多く存在し、「和気」、「岡山北部」、「府中」、「福山」、「玉島」、「高松南部」、「観音寺」はそれぞれ複数枚含んでいる。この他、伊予、阿波や周防にも存在するが、複数枚含む図幅はない。

九州はまず北部に集中する地域が見られる。福岡、直方、佐賀、久留米の図幅はそれぞれ複数枚含まれる。なお、唐津と大分周辺にも数多く存在し、「勝本(郷ノ浦)」と「臼杵」は同一図幅に2枚含んでいる。

九州南部については熊本、日向、鹿児島の周辺にそれぞれ複数存在する。特に日向には「延岡」「日向」「都農」「高鍋」「妻」「宮崎」の図幅に複数枚含まれる。また、「熊本」に3枚、「大口」と「開門岳」には2枚含まれている。なお、この地域の同一図幅に重複する地図はほとんど発行年が同じものであるため、比較的短期間の間に続けて入手された可能性が高い。すなわち、短期間の間に集中的な調査が行われ、同一図幅の地図を複数枚必要とした可能性が考えられる。鹿児島県内の地図については「鹿児島縣」の印が押されていることから、鹿児島県による地形図の提供を受けた可能性も考えられるであろう。

以上、本章では梅原寄贈地形図の概要について確認してきた。全体に西日本を中心とする地域に偏りがあるものの、梅原の調査や地図そのものの授受に関わる手がかりが残されていることが判明した。次章ではこうした点について、梅原の自伝『考古学六十年』（梅原 1973）をはじめとする文献に記された考古学調査記録の内容と照らし合わせ、各々の地形図がどのような調査で用いられたのかを検討していく。

IV 学史資料としての梅原寄贈地形図

(1) 梅原の巡検・調査記録にみる考古学・地理学の分化

まず赤や青などのインクでなぞられた巡検ルートと思しき書き込みと、その説明記述について確認する。1/20,000仮製地形図の場合、巡検に関する説明や日付の書き込みが豊富であり、また巡検の日付記載からも多くは明治期使用されたものと考えられる。赤インクで巡検ルートが書き込まれているのはのべ12枚になる。このうち、「高山村」（A7）、「愛宕山」（A8）、「沓掛村」（A9）、「枚方」（A11）、「星田村」（A12）、「国分寺」（A15）、「茨木村」（A17）、「天王寺村」（A20）、「金田村」（A21）、「八尾」（A14）および「堺」（A25、A26）の２枚となる。なお、「八尾」（A14）、「五條」（A16）、「狭山」（A22）については、記述内容からA15と同時期の調査・巡検に用いられたものと強く推定される。いずれも明治44（1911）年から大正３（1914）年頃の日付が書き込まれており、この時期に当該の地域で巡検を行なったことが読み取れる。

このうち、歴史地理学史と関わって特に注目したいのがA15、A21である。その裏面には当該期に喜田貞吉、岩井武俊、大道弘雄、関野貞、高橋健自らを案内した巡検の記録であることが示されている。『考古学六十年』によると、梅原は明治43（1910）年に山口県長府で開催された歴史地理学会の夏季大講演会に参加し、面識を得た喜田貞吉の勧めもあり、近畿周辺の史跡巡りを開始することが述べられている。まず、明治44（1911）年には郷里の河内羽曳山から横口石棺が出土したことから、喜田貞吉と毎日新聞社友の岩井武俊を現地に案内する。その後、喜田貞吉の紹介により、明治45（1912）年7月27日、奈良県の古蹟調査委員会の第一回委員会に出席した関

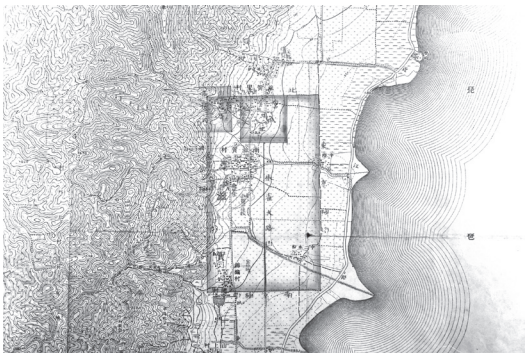

図6　大津京および崇福寺域の復原図
注）仮製 1/20,000 地形図「大津」（A2）より一部抜粋。

野貞、高橋健自、天沼俊一、谷井済一らの考古学者を関西線柏原駅に出迎え、津堂の城山古墳を中心に河内の遺跡群へ案内している。この際、それまで独学で考古学調査を行っていた梅原に対し、高橋は墳墓の特徴や異物の出土状況の見方などの方法を、関野からは実測図の作り方を伝授されたという[25]。これらの調査記録と地形図に記述された日付は一致する。

加えて、B9、B11、B12、B17には大正2（1913）年ごろの巡検・調査ルートが記録されている。『考古学六十年』によると、大正2年4月から1ヶ月余り、喜田貞吉が歴史地理学会で皇陵巡拝の手引書を作ろうと企画し、岩井武俊の助手として洛北大原を振り出しに畿内諸地方を調査したことが示されており、こちらも地形図に記述された日付は一致する。

以上の例は梅原の考古学者としてのキャリアにおける最初期のものであり、喜田を中心とした日本歴史地理学会の日本史研究者との交流や、後に梅原が自家薬籠中のものとしていく詳細な記録や製図の技術を関野らの建築学、考古学研究者達から学習していくプロセスを示したものである。まさに、梅原の関心が地理学や歴史学と未分化の状態から、考古学へと具体化していくプロセスを示す資料と言えるだろう。

ただし、調査時期が明らかに後年のものであることを示す地図が、1/20,000仮製地形図に一枚だけ含まれる点に注意が必要である。「大津」（A2）には大津京と崇福寺との復原プランが赤字で書き込まれている（図6）。『考古学六十年』によると、この内容に該当する調査は昭和12（1937）～13（1938）年にかけて昭和15（1940）年の皇紀二千六百年記念に先立って滋賀県により行われた神武天皇にゆかりがあるとされる場所の総合調査と推定される。すなわち、これは「天智天皇を奉祀する近江神宮の創建が決められた滋賀県」による、「西田直二郎をリーダーに前後三年に及ぶ調査」であり、「三門と塔と金堂が一直線にならぶ四天王寺式の伽藍配置」をもつ遺構が確認されたことを記している（梅原 1973: 187-188）。なぜこの時点でより新しく入手し得た地形図を用いなかったのかは定かではないが、古代における大津京や崇福寺の復原プランを考察する上で、より古い明治期の地形を示す地図が便利であった可能性も考えられる。この他、南山城の木津町（A4）にも国分寺址や朱雀大路の復原案が記されており、梅原の調査と地理学の景観復原的方法の関係を考える上で興味深い。

同様に1/50,000地形図の場合を確認すると、328枚中28枚に巡検ルートの書き込みが確認された。対象地域は山形の1枚を除き、近畿周辺（滋賀県内に複数枚と「京都西北部」、「吉野」と「高野山」、兵庫県の「北條」と「高砂」）と九州地方に集中している。

『考古学六十年』によると、梅原が行った最も初期の九州地方における古墳調査の例として確認できるのは、宮崎県の有吉忠一知事による西都原の調査であろう。これは「皇祖の発祥の地」を顕彰する意図で東京帝国大学、京都帝国大学をはじめとする各機関の有力な研究者を集め、大正元（1912）年から同6（1917）年にかけて6次にわたり行われた調査である。現地には出土品を収蔵する宮崎県立史跡研究所も建造され、その第三回調査には小川琢治、今西龍を筆頭に、内田寛一や島田貞彦、そして梅原末治という京都帝国大学の地理学、考古学の主要メンバーが総出で参加した。明治37（1904）年発行の「宮崎」（B242）には宮崎近郊を周遊するルートが赤インクで示されており、ルートの周辺には「横穴」や「瓢箪墳」、「石鏃」の出土を示す書き込みが集中している。また、宮崎近郊には鉄道線と駅舎を示すと思われる書き込みが存在する。梅原は後年、この時の調査を振り返り、「ちょうどそのときに軽便鉄道が出来ました。宮崎から妻をへて少しさきまでやっとついたのです。出来て半月くらいですね。」と述べており（東方学会 2000b: 65）、ほぼこの時の調査記録とみて間違い無いだろう。なお、梅原は宮崎での調査後、「今西先生の配慮で熊本千金甲の装飾古墳や、福岡の高良山神籠石の列石を実見し、実り多い一ヶ月の旅を了えた」としており、九州地方の各地で見聞を深めたことが窺える（梅原 1973: 21-22）。

大正5（1916）年に濱田耕作が帰国すると、京都帝国大学考古学教室による古墳等の調査も本格化した。西都原の調査が続行される一方、濱田は梅原を伴って北九州の壁画古墳調査、筑前須久の遺跡、久

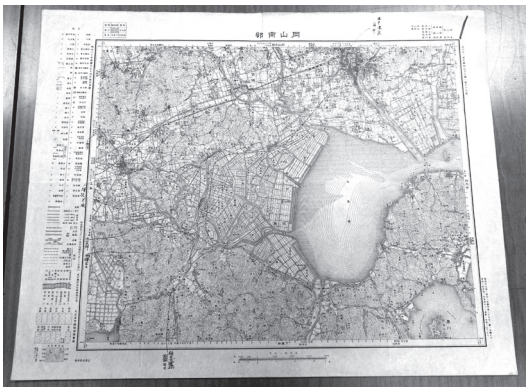

図７　藤岡謙二郎が参加した考古調査の地形図例

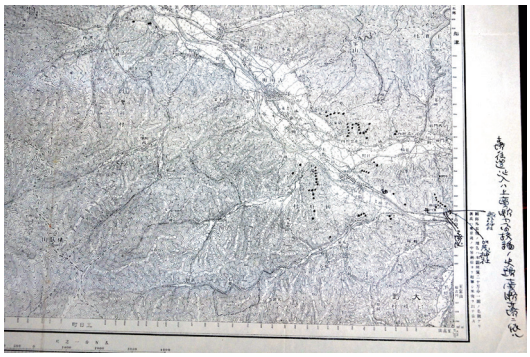

図８　梅原による古墳調査の例

注）「飛騨古川」（B27）より古墳の分布、およびその基礎資料に関する書き込み部分を抜粋。

留米地方の日輪寺、月の岡の遺跡や熊本県の六嘉村の井寺古墳、同じような宇土郡不知火村の石棺墓をみてまわったとしている。九州地方の地形図が数多く含まれるのは、これらの調査によるものと推定される。すなわち、梅原自身が熊本県の史跡調査、大分県総合調査などに関わるとともに、「教室の九州を中心とした調査事業は毎年定期的に行われていた」からと考えられる（梅原 1973: 64）。

なお、昭和4（1926）年以降の調査については『考古学六十年』の巻末に「発掘調査略年表」があり、そこには調査参加者の名前が付されている（梅原 1973: 329-342）。先史地理学との関係を重視して、上述の略年表中の調査参加者に藤岡謙二郎の名があるものに絞って確認すると、昭和11（1933）年9月から10月に行われた岡山県苫田郡と都窪郡での2度の調査、昭和14（1939）年12月に大阪北河内で行われた貝塚、縄文式土器の調査、昭和14年から同15年にかけて島根県能義郡荒島で行われた調査、そして昭和18（1943）年10月に高知県龍河洞で行われた骨角器、弥生式遺物調査の5つが該当する[26]。

岡山県都窪郡の調査例と梅原寄贈地形図の書き込み内容の対応を確認してみよう。「岡山南部」（B179）は岡山県都窪郡周辺での調査内容を記録した地形図と比定される（図7）。縄文貝塚や銅鐸の出土地に関する記述に加え、現地での協力者と思われる「永山氏」の自宅が書き込まれている。また、岡山市周辺の集落に赤点で強調が付されているなど、ルートをなぞる書き込みこそないものの、周辺の巡検を行なったことが想定される内容となっている。これらの記録は、藤岡が参加し梅原の指導下に訓練を受けた考古学調査の実態を記録するものといえよう。

(2) 人脈・提供者

つづいて、図面に記述された人名から、梅原の人脈に関する内容を読み取っていく。まず、1/50,000地形図中には「寄贈」「所蔵」などの書き込みや梅原以外の所蔵印が認められる例から、元の所蔵者が判明する例が存在した。梅原以前に当該の地形図を所有した機関に関わる所蔵印のあるものが32枚あり、このうち28枚は「鹿児島縣」の印が確認できる。いずれも昭和10年代の発行年を示し、開聞嶽（B311）には「昭和十九年一月十六日穎娃遺跡調査」の記述があることからこの前後の調査時に鹿児島県から提供を受けた地形図と考えられる。

所蔵印以外に従前の所有者を窺わせる手がかりとして、裏面への書き込みがあり、7枚の地形図に蘆田伊人、伊東富太郎、山崎正一、森奥次郎の4名の名が確認された。例えば、大阪の4図幅を寄贈した蘆田伊人は、吉田東伍や喜田貞吉の指導、協力のもとに日本歴史地理学会の同人として『歴史地理』誌に多く寄稿し、『大日本読史地図』の作成刊行や『大日本地誌大系』の編纂を行なったことで知られる歴史地理学者である。蘆田は古地図・地誌を数多く蒐集していたとされる（国史大辞典編集委員会 1979: 186）。したがって、この4図幅は日本歴史地理学会の人脈を通じて地形図という資料が移動、融通されていたことを示すものといえよう。

この他、所蔵印から梅原以前の所有者として福井県立三国中学校（B39）と鳥取県西伯郡養良実業補習学校（B162）が浮かび上がる。さらに、図面への書き込み内容に学校の名称が含まれるのは福井県立三国中学校を含め5枚存在するが、いずれも昭和期に入ってから発行されたものであり、調査時期も昭和期以降と推定される。「上広瀬小学校編ノ史蹟広瀬古墳」により周辺の古墳の分布情報を提供した「飛騨

古川」（B27）の例に見るように、この時期には各地域の学校が古墳等の考古学情報を集約しており（図8）、それらの情報提供が梅原をはじめとする京都帝国大学考古学教室の調査においても重要になっていたことを窺わせる。同様に地元郷土史家の実力も高まっており、その協力も手厚いものになっていたことも窺える[27]。11枚の地形図に11名の協力者ないし情報提供者の名前が存在し（B34、B113、B179、B243、B257、B260、B265、B283、B300、B317、B320）、彼らによる所蔵遺物や発掘調査の情報提供が存在したことを示している。

なお、「和歌山」（B113）にある「谷井氏邸宅」は既述の谷井済一を指すものと考えられる。和歌山市の素封家出身である考古学者の谷井済一は梅原に対して写真撮影の技術伝授や京都帝国大学の今西龍の紹介、朝鮮半島での調査などにおいて多大な協力を行なった。明治44（1911）年に谷井が和歌山に帰る際、「一緒に来るよう勧誘して下さった。好意に甘えた私は谷井氏宅に半月逗留し、紀州徳川候が学者を招き調査されたことで有名な和歌山市外の岩橋千塚とその出土品を中心に考古学に関する基礎学習をしてもらった」と記している（梅原 1973: 14-15）。B113は昭和21年の発行であるからこの時点での調査とは考えられないが、昭和期に至っても梅原と谷井の交友関係が続いており、和歌山を訪問する際には谷井邸にも赴いていたことを示すものであろう。

V おわりに

本稿では日本の実証主義的な歴史地理学の景観復原研究の潮流を形成した基盤として、京都大学文学部における地理学教室と考古学教室の交流に注意し、従来未確認であった梅原末治が地理学教室に寄贈した地形図コレクションについて、主にその図面への書き込みと加工に注目して検討した。

まずⅡでは初期の文学部陳列館を舞台に、考古遺物をはじめとするモノを中心に地理学教室と考古学教室の関わりが見られ、濱田および梅原の型式学的考古学研究法が小牧、そして藤岡の先史地理学研究に影響を与えたことを確認した。また、Ⅲでは梅原寄贈地形図コレクションの全容を紹介するとともに、図面への様々な書き込みや加工が存在することを示した。Ⅳでは以上をふまえ、梅原寄贈地形図が学史研究のための資料として有する可能性について、巡検・調査記録に関する書き込みを検討し、これらは日本史、地理学、考古学、建築学、美術史などの分野が未分化な状態から個別に専門化していく過程を示していたことを確認した。それは梅原自身が自らの関心を考古学として具体化していく過程であり、濱田と梅原の下でその教育を受けて誕生した小牧と藤岡の先史地理学研究がさらに分化していく過程につながった。また、こうした当時における学問の状況下で、一部の図幅では梅原以前にも別の所有者が存在しており、黎明期の歴史地理学、日本史学、考古学者間で貴重な資料として地形図が融通されていたことも明らかになった。この点は、地形図が研究者の間を渡り歩き、集約されていくという物質的存在であることを示している。

以上のように、本稿の検討によって、物質性に着目した学史研究という視角を導入し、これまで不明瞭であった先史地理学の景観復原研究に与えられた考古学の実証性に関わる影響の一端を明らかにすることができたと考える。しかしながら、筆者の考古学史に関する分析や理解が不十分で、残された課題も膨大にあることは率直に認めざるを得ない。第一に、本稿では調査対象を日本国内の地形図に限定した。梅原の重要なフィールドが戦前期の朝鮮半島や中国大陸にもあったことを考えると、外邦図等の資料にも梅原寄贈印のあるものがないか検証する作業が必要であろう。第二に、本稿は梅原が所蔵した地形図の分析を行ったに過ぎない。梅原の考古調査資料については東洋文庫に膨大な写真、拓本、実測図などが遺されており、考古学史への理解を深めるとともに、これらを参照した検討を進める必要があるだろう。第三に、本稿では議論を先史地理学と関わるものに限定した。しかし、小牧の時の断面説を継承したのは藤岡だけではなく、米倉二郎の条里制研究や木下良の国府研究を適切に位置付けつつ、これらと考古学研究との関わりについても検証する必要がある。今後の課題としたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、京都大学大学院文学研究科地理学教室の田中和子教授、米家泰作准教授、京都大学総合博物館オフィスアシスタント（調査当時）の仲田志織さんには手厚いご支援を賜った。京都大学大学院人間・環境学研究科の山田誠名誉教授、京都大学大学院文学研究科の平井秀夫教授、京都大学総合博物館の村上由美子准教授には貴重なご教示を賜った。京都大学大学院文学研究科地理学教室および京都大学大学院人間・環境学研究科地域空間論分野の院生諸氏からは資料調査においてご協力いただいた。記して深く感謝いたします。本研究はJSPS科研費17H02430、19K01193の助成を受けた。

注

1) ただし、こうした地理学教室の多くが1980年代以降に社会学や心理学に代表される実験系の社会科学へと所属を移動させてきた。これは大学改革を背景としつつ、計量革命から社会理論に至る英語圏地理学の新たな動向を摂取したことによるものと指摘されている(水内 2006)。

2) 第二次世界大戦中の日本地政学に関する研究は、久武(1999, 2000)、柴田(2016)などにより近年長足の進歩を遂げた。

3) 19世紀のマイツェン(A. Meitzen)の地割形態研究や20世紀のシュリューター(O. Schüluter)をはじめとする景観地理学派の影響を受け、日本でも農村景観の変容が議論された(藤岡・服部 1978)。

4) 水内はこの京都帝国大学地理学教室から発達した歴史地理学研究を「京都の正統派歴史地理学」と呼称し、その具体的な検討課題は条理制、地割、村落形態の解明をベースとするものであったことを指摘している(水内 2006)。

5) なお、京都帝国大学文科大学史学地理学第二講座の後身である京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻地理学専修の地理学教室では、教室の歴史を特徴付けてきた研究テーマとして、歴史地理学、地図史、地理学思想史、村落地理学、都市地理学の5項目を示している(京都大学文学部地理学教室2008: i-ii)。

6) 小牧の「時の断面」の規定による研究は、可視的な景観を個別的・静態的・形態的に研究する復原するものであり、発生的・歴史的視角を著しく欠くものであった。これに対して、藤岡はH. Darbyの研究に学びつつ、厚みのある「時の断面」を強調した(金田 2002)。

7) 2011年に刊行された「地域と環境」第11巻は「藤岡謙二郎先生収集遺物特集号」になっている。

8) ジリアン・ローズは地図を含む地理学研究が扱い、生産する視覚資料の物質性に着目した議論が必要であると説く(Rose 2016)。

9) なお、潤沢な予算の獲得と数年にわたる計画により、完成した陳列館は当初の目的であった陳列室に加え、貴賓室や教官室、研究室、講義室、閲覧室、書庫、地下写真暗室を完備する、地上地下を含めて4階建ての建物であった。史学科研究室に所属した各教室は挙って文学部陳列館に移動することとなった(京都帝国大学文学部 1935: 51-58)。

10) 一例として、大正6(1917)年には神戸の岡崎藤吉氏による購入資金の援助を得て中国での調査を行い、琉璃廠の古物市場で購入した河南省で出土した押型紋のある空塼類や石仏・古陶器などの古物が収められている。

11) なお、梅原と藤岡は「カフェ・アーケオロジー」に人が集まった一要因として、当初の文学部陳列館では火災への配慮と内田銀蔵教授が喫煙を嫌ったことから室内の完全禁煙が定められていたが、愛煙家であった濱田は着任すると自室での喫煙に責任を持つことを強く主張し、愛煙家がこの部屋に集まるようになったと指摘している(梅原 2005, 藤岡 2005)。

12) 角田は「濱田博士は親友の小川博士の依頼がある上に、小牧先生は学問も俊敏であり、容姿、態度が上品で瀟洒であることを愛でて親身になって世話をされた」と評している(角田 1994b)。

13) 旧石器時代を取り上げた背景には、当時日本における氷河の研究に関心を深めていた小川は日本に旧石器時代が存在したことを主張し、これに濱田も同調していたことがあった(東方学会 2000a: 21-23)

14) 訪問した遺跡には旧石器前期のシェル遺跡、ハイデルベルク人の下顎骨出土地、チェコ・スロヴァキアのプシェッドモスティ遺跡、フランス・ヌーヴェル=アキテーヌのラ・キーナ遺跡などが含まれる(東方学会 2000a: 22-23)。

15) 浜田の薫育を受けた歴史地理学者として、藤岡は藤田元春、寺田貞次、米倉二郎、室賀信雄夫などをあげている(藤岡 1979: 75-76)。

16) 梅原の実測に対する技術者的側面の重視が濱田の姿勢といささか異なることを強調するため、藤岡は以下のエピソードを紹介している。「カフェー・アーケオロジーの午後三時の会には、…濱田教授中心の雑談会をよそに、当時助教授であった梅原先生が部屋の片隅でせっせと土器か銅器かの実測をやっておられた姿も目に浮かぶ。この学問一徹の梅原先生によく叱られたことも後世確かに役に立った。」(藤岡 2005)

17) 昭和21年には先史時代の文化と自然環境との問題を地理学の環境論的立場から検討する『地理と古代文化』を公刊する(京都大学文学部地理学教室 2008: 25)。

18) 喜田貞吉の歴史地理学研究や歴史地理学観、日本歴史地理学会での活動などについては川合(2011)に詳しい。

19) 喜田貞吉は後に、こうした状況を「普通は教授が何人かの弟子をもっているのに、梅原は小僧のくせに何人もの教授帳を持っている」と評したという(穴沢 1994 : 224, 梅原 1973: 9)。

20) 梅原は内藤の紹介により無休の手伝いとして文学部陳列館への出入りを許されると、その後、陳列館の助手や教務嘱託を務めて考古学教室のスタッフとなった。また、梅原は富岡家に寄寓するとともに、富岡謙蔵の死後、その遺稿をまとめる作業に従事し、この過程で古鏡研究の基礎を身につけたという(穴沢 1994: 224-225)。

21) 梅原は「関野先生は日中調査された事柄を予め定められていた大きさの調査書に、その日のうちに整理し…どちらかというと芸術家肌、天才肌の浜田先生はこうした方法はむしろ苦手」と評する(梅原 1973: 40)。

22) なお、この時期から梅原は日本での調査に並行して朝鮮半島でも調査・研究を進めており、そこでも関野貞らによる楽浪漢墓や梁山夫婦塚の発掘整理に参加している(穴沢 1994: 226-227)。

23) ただし、こうした梅原の研究戦略は濱田が備えていた人文学的素養という重要な側面を削ぎ落としたものであり、没理論的でなおかつ検討の対象を狭く限定して人間の社会や文化といった広い視野からの議論を拒絶する「厳格経験主義」の産物であるとする批判がある(穴沢 1994, 2014a, 2014b, 2014c)。また、山中(2002)は穴沢の

議論を敷衍して、当時の文脈において梅原の立場を擁護しつつ、没理論的な傾向は既に浜田にも認められると主張する。すなわち、独り梅原のみの落ち度ではなく、ペトリーを経由して招来した型式学的方法論への無批判性こそが最大の問題であると喝破する。

24) 京都大学名誉教授の山田誠氏によると、藤岡謙二郎の指示で1970年代に毎週末梅原邸を訪問していた高橋誠一（故人）を通じて地理学教室に寄贈された可能性が存在する。高橋誠一は1973年から1976年に京都大学文学部地理学教室の助手を務めた。

25) 当時を振り返り、梅原は以下のように述懐する。「私に古市唯一の旅館だった扇屋に同宿を命ぜられた。先生方が、日々調査されたメモや実測図を、その夕べに整理されるのを見て、私もその方法を守ることを心に誓った。」（梅原 1973: 14）

26) ただし、大部分の調査における参加者氏名の後には「等」と付されているため、藤岡がこの他にも多くの調査に参加していた可能性は極めて高い。

27) 例えば、大正6年の山陰における調査では、出雲、伯耆の史跡探訪で辻善之助に随行したこと、また、松江師範四年の石倉暉栄をはじめ、太田勝友、木山武治ら「郷土史愛好家と面識を得て、以後の調査に協力を仰いだ」ことなどが述べられている（梅原 1973: 29）。

文献

足利健亮. 1982. 小牧実繁と歴史地理学. 京都大学文学部地理学教室編.『地理の思想』206-216. 地人書房.

足利健亮. 1994. 藤岡謙二郎博士. 角田文衛編.『考古学京都学派』211-216. 雄山閣出版.

穴沢咏光. 1994. 梅原末治論. 角田文衛編.『考古学京都学派』218-301. 雄山閣出版.

穴沢咏光2014a. 梅原末治論（前編）モノを究めようとした考古学者の偉大と悲惨. 季刊邪馬台国 (120): 73-123.

穴沢咏光2014b. 梅原末治論（中編）モノを究めようとした考古学者の偉大と悲惨. 季刊邪馬台国 (121): 120-151.

穴沢咏光2014c. 梅原末治論（後編）モノを究めようとした考古学者の偉大と悲惨. 季刊邪馬台国 (122): 118-133.

梅原末治. 1973.『考古学六十年』平凡社.

梅原末治. 2005. 開館当初の文科大学陳列館の思い出. 京都大学文学部編『以文会友』139-162. 京都大学学術出版会.

岡村秀典. 2011. 古鏡研究一千年——中國考古學のパラダイム. 東洋史研究69(4): 523-547.

小野山節. 1992. 濱田耕作（一八八一–一九三八）. 江上波夫編『東洋学の系譜』213-224. 大修館書店.

川合一郎. 2011. 喜田貞吉の歴史地理学——未発表の講演録・講義ノートの分析を中心に. 人文地理63(5): 41-56.

川合一郎. 2017. 小牧實繁の歴史地理学—その理論と実践的研究. 歴史地理学59(4):3-18.

京都大学文学部編. 1956.『京都大学文学部五十年史』京都大学文学部.

京都大学文学部地理学教室編. 2008.『地理学　京都の百年』ナカニシヤ出版.

京都帝国大学文学部編. 1935.『京都帝国大学文学部三十周年史』京都帝国大学文学部.

金田章裕. 2002.『古代景観史の探究』吉川弘文館.

国史大辞典編集委員会編. 1979.『国史大辞典　Ⅰ』吉川弘文館.

小牧實繁. 1937.『先史地理学研究』内外出版印刷.

柴田陽一. 2006. 小牧実繁の「日本地政学」とその思想的確立——個人史的側面に注目して. 人文地理58(1): 1-19.

柴田陽一. 2016.『帝国日本と地政学——アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践』清文堂.

角田文衛編. 1994a.『考古学京都学派』雄山閣出版.

角田文衛. 1994b. 小牧實繁先生. 角田文衛編.『考古学京都学派』123-146. 雄山閣出版.

東方学会編. 2000a. 先学を語る　小川琢治博士.『東方学回想Ⅱ先学を語る(2)』3-31. 刀水書房.

東方学会編. 2000b. 学問の思い出　梅原末治博士を囲んで.『東方学回想Ⅵ学問の思い出(2)』53-79. 刀水書房.

東方学会編. 2000c. 先学を語る　小川環樹博士.『東方学回想Ⅸ先学を語る(6)』121-146. 刀水書房.

久武哲也. 1999. ハワイは小さな満州国——日本地政学の系譜. 現代思想 27(13): 196-204.

久武哲也. 20000. ハワイは小さな満州国——日本地政学の系譜（承前）. 現代思想 28(1): 60-82.

藤岡謙二郎. 1955.『先史地域及び都市域の研究』柳原書店.

藤岡謙二郎. 1979.『浜田青陵とその時代』学生社.

藤岡謙二郎. 2005. 陳列館時代の思い出京都大学文学部編『以文会友』184-188. 京都大学学術出版会.

藤岡謙二郎・服部昌之編『歴史地理学の群像』大明堂.

水内俊雄. 2006. はしがき. 水内俊雄編『歴史と空間』i-iv. 朝倉書店.

山中一郎. 2002. 濱田耕作はなぜ近代考古学の父なのか. 砺波護・藤井譲治編『京大東洋学の百年』99-131. 京都大学学術出版会.

吉井秀夫. 2006.『植民地朝鮮における考古学的調査の再検討』文部科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書.

Rose, G. 2016. *Visual Methodologies: an introduction to researching with visual materials, 4th edition*. Sage.